それいけ、アルカディア!　（旧395年遅れの箱庭）

よせ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
それいけ、アルカディア！　（旧３９５年遅れの箱庭）

【Ｎコード】
Ｎ４９８６Ｒ

【作者名】
よせ

【あらすじ】
いろいろあって魔法……じゃなくて魔術とかある異世界に行くことになった主人公こと神也。だけどとりあえず神様のところで気づいてたら１年以上過ごしてました。他の人はとうに行ってしまったというのに……。　結局神様のところに居ついて１年と１ヶ月、やっと重い腰を起こした彼を待ち受けていた異世界では、なんと既に三百九十五年の月日が流れていて主人公の創った箱庭、所謂国が既に占拠されていた状況で……。　とりあえずその現状を知った主人公、神也は自分の領土の奪還を決意する事になりました。　◇

おはこんばんちは、よせです。寄席じゃあないです。
　この小説は、主人公が俺ＴＵＥＥＥＥをするのは少し後で、その前までは主人公の周りにいる仲間達が最強系でちーとパワーを振りまくお話です。振りまくりです。　爽快感、疾走感はあまり無いと思われるので、そゆのを求めてる方はご注意してくださいな。
　また、この小説は最強系なので主人公勢がピンチになったりはしないのでご安心を。ただ、少し境遇がかわいそうのとかは出てくるかもしれません。ちなみに作者は主人公がハッピーエンドになるのはすごい好きです。

００-（前書き）

初小説で、異世界最強ものになる予定です。
あ、でも主人公ぜんぜん強くないです、今のところ。主人公の周りが最強系にしたいな、と思ってたり。
だけど、その道のりは遠いです・・・・・・くそぅ。
そこそこがんばります。

00-

八枚の畳が敷かれた和室、そこに一人の男があぐらをかいて座布団に座っていた。

彼――見た目十七、八ぐらいに見える――は湯気が出ている湯呑みを片方の手は底に、もう片方は側面にそえて持ち、その中身のお茶をすすりながら「ほう」と息をついて、

「お茶超うめぇ―」

お茶を堪能していた。

彼がいる和室の畳は祝儀敷き―真中に敷いた畳を囲むように―に敷かれ、部屋の片隅には液晶テレビ、床の間の掛けてある掛け軸には力強く筆で【一日一膳】と書かれている。部屋の中心に置いてある円形の卓袱台の上には、栞が挟まれている文庫サイズの本と、和風の小皿の上に一口サイズの二切れの洋かん、それにそえられた一本のフォークがある。

彼は午前中からの家事を一通り終え、特に今やる事は無かったため、とりあえず休憩がてらに和室でお茶をすすりながらテレビを視聴し、この屋敷の主が帰って来るのをのんびりと待っていた。

手に持った湯呑みを置き、フォークに洋かんをぷすりと刺して口に入れようとした瞬間――

「神也」

――という透き通るような声とともに、襖が静かに開いた。

神也と呼ばれた少年はその方向に首を向けて、入ってくる人物に目をやる。

「あ、おかえりなさい。今回のお仕事はもう終わったんですか？」

「ええ、特に滞りなく」

襖を開けた所には、一人の女性。

くすと微笑んだ彼女の艶のある唇、さらさらした黒髪は足元までのびたストレートヘアー、そしてその瞳は海のように深く蒼い。見た者全てが美しく綺麗だと言わせる美貌をもち、両耳には瞳と同じ色をした宝石のイヤリングを着けている。百七十に届くかどうかといった女性にとっては高い身長に、触り心地が良さそうなローブから出ているきめ細やかな白い肌。彼女の体つきはバランスの良い一つの曲線美を描く。

彼女を見た者は、まるで女神のようだと思わせられるだろう。

というか彼女は――――――

「じゃあお夕飯にしますからそれまでゆっくり休憩しといて下さいね。神様」

「お言葉に甘えます。ありがとう神也」

「いえいえ」

――――――本当に神様だった。

◇

カチャカチャと、食器同士が当たり音を立てる。
神様と神也の二人がダイニングテーブルに置いてある、木製のアンティークな椅子に向かい合って座っており、ダイニングテーブルの上には、パセリが少し加えられたペペロンチーノ、子羊の肉やジャガイモ等野菜を煮込んだポトフ、オレンジ色のスープが並んでおり、そのとなりにある、硝子製の透き通ったコップにはジュースが入っている。
窓から見える空は暗い。今の時刻は夜の内に入りで、夕飯だった。
彼女、神様はスプーンでスープを掬い、口に入れ、
「うん、神也の料理はやはり美味しいな。毎日でも食べたいくらいだ」
満面の笑顔でスープを評価する。
神様は今は仕事モードも解いて、雰囲気もちょっと違う。強いて言うなら美しい薔薇の棘が数本抜けたというところだろうか。
「もう既に毎日作ってるじゃないですか」
「ん、そういう訳ではないのだが……まあいいか」
彼女はそう言いながら、スープをスプーンを使い飲み続ける。
「その様子だと、今回のスープの味付けが神様の好みにあってたみたいですね。良かったです」
神也も自分の作った料理が誉められて、当たり前だが悪い気はしない。はにかみながら食事を続ける。

「神也の料理は美味だからな。私は神也の作った料理なら何でも食べられるよ」
「人参でも？」
「それは無理だ」

即答。
どうやら神様はとことん人参が嫌いのようだ。
その返事を聞いた彼は企んだ悪戯が成功したような笑みを浮かべ、

「因みにそのスープ」
「うん？このスープがどうかしたのか？」
「神様が嫌いな嫌いなその人参をベースにしてます」

（神様にとっての）核爆弾を投下した。

それを聞いた彼女は、何を言われたか理解ができずに、口に運んでいたスプーンの手が停止した。
数秒の間を空け、やっと思考が追い付いたようで、驚愕の表情を顔に浮かべ、

「ば、馬鹿なッ！！」

と、大きい声を出した。
その慌てぶりを見た神也は腹を抱えて笑い、彼女の目を見てはっきりと断言した。

「本当です」

カランッ。
神様の右手からスプーンが落ち、スープの皿にぶつかり音を立て

てスープが跳ねる。幸いにして、跳ねたスープは彼女の着ている服にかからず、また皿の外に出ることも無かった。因みにどうでもいいが神様は両利きである。
　スプーンを落とした後、神様は両手で顔を覆ってうつむき、わなわなと体を振るわせるのを見て、神也はちょっと驚きつつ少し心配になり始めた。

「あの神様大じょ」
「神也！　酷いではないかッ！　私が人参を苦手と知っておきながら人参料理を出すなどとは！　神也は私が嫌いか？　嫌いなのか？！」
「違うよ！？　そんなことないよ！！？」
「じゃあ何でこんな惨いことをするんだ！！」

　うつむいた顔を急に上げ、声を荒げてながらそう言いながら、テーブルに手を付き身を乗り出す。神也を見つめる深い蒼の瞳が少しうるんでいる。

　この表情は彼女にとっては怒っている表情なのだろうが、本人以外からは凛々しい顔が涙目になっている様は可愛いとしか言いようが無い。薔薇の棘がほとんど抜けた顔で近よられ、その視線を一心に受けた彼は、慌てながらもちょっと鼻血を出そうになるのを気合いで耐える。

「いや食べ物の好き嫌いくらいなくさないと……」
「嫌だ！　嫌いな物は嫌いなのだ！！」
「そんなこと言わずに人参くらい、神様なんだから……ね？」
「神様なんだからってなんだ！？　神様だから好き嫌いを無くさなきゃいけんのか！？　そんな神様差別反対だっ！！　横暴だ、とにかく人参は嫌だ！　人参ヤバいんだぞッ！！」

その美しくて凛々しい顔を崩して涙目になって真っ赤になりながら必死に人参ヤバいんだぞッ！！　と言われても、人参の何がヤバいのか神也は分からない。神界産の人参は毒でも有るのだろうか。あと地味に鼻血がヤバくなって来ている。耐えるのが辛い。

「ヤバいのだ！　食べたら異の中から液状になった人参が腹を喰い破って来るんだぞ！」

「何それグロッ！？」

とんだエイリアンだと思いつつ、神様を落ち着かせること数分。神様はちょっと泣きつつも冷静を取り戻し、神也の鼻血は抑えられ、神様の美貌の棘も完全ではないが、大分回復してきている。

「ふー、ふー……。神也、大体本来神と言うものは食べ物など別に食べなくてもいいのです」

「う……それはそうですけどね……。」

「それなのに食べさせようとするなんて鬼ですか貴方は？」

あう。

と内心思う。

そう、神は別に食事を食べなくてもいいのだ。勝手に成長していく神にとっては食事は一種の娯楽要素でしかない。

神は栄養を取らない。

神は老廃物が出ない。

神の食事は娯楽要素。

神の食事は食べ物の味を楽しむくらいでしかないのだ。

しかし、この神様は毎日三食ちゃんと食事を取っている。ではなぜこの神様がその娯楽の一種でしかない食事を毎日とっているのかと言うと、

「……あー、でもほら、スープ、美味しかったです……よね？」

彼、神也が原因だったりする。

まあ彼がここに暮らしている間に、彼女の三食全てを料理する事になったのだが。

今回の人参騒動は、彼女の嫌いな食材を美味しく食べさせて、苦手な人参を克服させようと思って作った料理だったのだが、その具材を教えたのは彼女にとって逆効果だったようで、彼にとってこの反応は予想外過ぎた。

「……」

「ま、不味かったですか？そうだとしたら……」

「……そんなことない。美味しいから、ちゃんと食べ……る」

「そ、そうですか……けど、別に無理しなくてもい」

「ただし！！！」

「はいっ！　なんでしか！？」

「次からちゃんと人参入れたら報告すること！　こちらにも覚悟が必要だからな！」

「わかりました」

座りながら背筋を垂直に、びしと効果音が付きそうな敬礼をしながら必死に神也は応える。どうやら途中自分がかんだことにはスルーらしい。もしかしたら気付いてないのかもしれない。神也が人参を度々作った料理の中に入れてるのを気付いてないように。

このことは言わない方が良いだろう、と神也は内心思い、頭の隅に収納した。

その後、神様がスープの中に入れる生クリームをもっと入れろと

か、ペペロンチーノがちょっと辛いぞとか言われながら他愛の無い会話して、二人は料理を食べ終わった後、神也は皿洗いをし、吹き終えた皿は神様が片付けて、食事を終えた。

神也は居間を離れ、自分に与えられた部屋に戻り、敷いたままの布団の上に寝転がる。

触り心地がよく、ふかふかの枕に後頭部を埋め、着ているズボンの右ポケットに右手を入れ、掴んだ物を取り出した。

「……もう一年と一ヶ月、か」

仰向けになりながら右手に持ったタッチ画面式携帯電話を見て、神也はそう呟いた。

正確には一年と二十九日。

それが神也がここにいる時間だ。

（明日……だ……）

明日、神也は此処を発つ。

十三ヶ月前、神様に連れてこられた時は本当に驚いた。なにせ気が付いた時には既に地球とは別の空間にいたのだから。あの真白く、箱のようなの空間に。

暫し携帯を操作した後、神也は自分の横側に画面を伏せて携帯を置き、腹筋に軽く力を入れて上半身をお越して部屋の照明に繋がっている紐を右手でつかみ――――――

「寝る」

――――――右手を下ろして、部屋の明かりを消した。

◇

「おはよう神也」
「おはようございます神様」

翌日――。
神也滞在一年と一ヶ月。

「今日だな」
「今日ですね」

神也が此処から離れ、異世界に旅立つ日である。

「覚悟はしたか？」
「まあ半分くらいは、ですね」
「なんだ半分って。中途半端だな、神也は」

神也の返事を聞いて、神様は目を細めて苦笑する。
神也は恥ずかしそうに髪を掻く。

「異世界に行く覚悟は着きましたが、此処から離れる覚悟がまだです。と、いうより神様からですね。
結構神様に依存してしまいましたし」

二人がいる部屋は壁・床・天井と全てが白い。床から天井まで、壁から反対側の壁まで全ての辺が均一三十メートル前後の長さあり、言わば巨大な立方体だ。
部屋には何も置いておらず、床や壁にもタイルなどの繋ぎ目など無い。
一年と一ヶ月前の日と同じ部屋。彼等はその部屋の一つの壁側に一メートル程離れた位置で壁と対峙するように立っている。

「……むぅ。
まあなんかあったら帰って来い。私が直々に歓迎してやろう。うむ」
「ははっ。僕に死ねってことですか？なるべく遠慮しときます。
それと歓迎料理は神様特製の肉じゃがでお願いします」
「ん、任された。期待しておけ」
「もちろんです」
「……さあ、では始めようか」

神様はそう言うと親指と中指を重ね合わせ、指を弾いた。
地面が揺れ、彼等が立っている側の壁に、音を立てて扉が現れる。
その扉は幅十メートル、高さ二十メートル程の大きな扉。寧ろ門と言った方が正しいだろう。その両扉の中心には、金でてきたクラウンや薔薇の蔦、白銀の鷲・銀の一角馬などで豪華に飾られている。

「おお、久しぶりに見るけどやっぱり迫力あるなぁ」
「そうか？神界に行くときにくぐる門とかに比べたら対したこと無いが」
「……この前神様に見せて貰いましたけどアレは比べる方が間違っ

てると思います」
「む、それもそうだな。さてと」
神様は扉の戸口に手を掛け、目を閉じる。
これから神也が行く異世界に繋がるように座標を指定しているのだ。そして十秒程経つと彼女はゆっくりと目を開き、戸口から手を放して、神也の方に顔を向ける。

「出来たぞ」
「はい」

神也は扉の方に歩き始めた。その表情は緊張一色で染まり、どこか歩く動作はぎこちない。その緊張の原因は主に異世界に今から旅立つという事と、自分を見ている彼女の視線の二つだ。後者の方が、緊張の原因の割合を多く占める。
神様は表情を切り替えて、仕事の状態になっている。その近寄り難く、凛々しい雰囲気を纏う容姿端麗の絶美神から突き刺さる様な視線を浴びているのだ。緊張しない方がおかしい。

神也が神様に並ぶように扉の前に立ち、取っ手に手を掛けた。

「じゃあ神様」
「ん」

神様は腕を胸の前で組み、首を縦に軽く動かし、それを見た神也は笑う。

「まああっちでも頑張りますんで」
「そうだな、頑張れ。……あー」
「？　どうしました神様」

急に顔を伏せた彼女を不思議に思い問いかけてみてみたが、神様は返事をしない。
そして勢いよく顔をあげた。
ちょっと頬を赤らめたその表情は、神也と同じようにどこか緊張している。

そして――――

「ん、あれだ。“行ってらっしゃい”だ！」

――――声を少し荒げてそう行った後、彼女は優しく微笑んだ。
神也は始めきょとんとしていたが、すぐに笑顔になり、誰もが知る挨拶を返す。

「――はい！“行ってきます”！！」

そして取っ手を引き巨大な扉が開く。扉の中は光で包まれており、その光は扉からは漏れ出さず、内部で留まっている。その中に神也は進んで行き、この場から消えた。

その暖かな笑顔を後にして。

◇

「行ったか……」

一人残った彼女は小さく呟き、再び指を鳴らす。
門のような扉は壁に沈み、只の真白い壁に戻る。彼女はその様子を見届けた後もしばらく壁を見つめた。

「ああ――――」

そして急に両肩を抱き締めるように掴み、彼女が着ているローブに皺が出来る。

「本当に、本当にすまないな……。神也」

彼女は悔しそうに眉を潜め、血が滲む程強く唇を噛み締めてそう呟いた後、肩から手を放して、その部屋から踵を返した。

――――――――――――彼女が去った部屋には、もう誰もいない。

０１ー（前書き）

２話目ー１５ＫＢ以上はあるんでないでしょうか、自分の中ではそこそこ書きましたかねー。

01―

アルズヘイム大陸の北陸部を広く占める国、リュテミス王国。
ここはその横に位置するグシト地方――王国の五分の一にも満たないが――を治める国、シェロウ。

その中心に建てられている城の内部――中間くらいの高さ辺り――にある部屋、おそらく事務室だろう。内部はかなり広いのに対し、其処に置かれている机は一つしかない。分厚い本が並べて置かれている本棚が壁を四方の壁の内出入り口の在る扉の壁を除いた三方を占拠している。天井からぶら下がる小さめなシャンデリアが部屋を照らし、窓から入る日差しは部屋を暖かくして仕事の作業机を明るく照らす。

部屋に一つしかない木製の作業机は、一般のに比べて二周り以上大きい。しかしその上は書類の紙で埋まり、机の地がほとんど見えてない。書類のほかにシェロウ国の印鑑に、個人の名が彫られた判子。魔道具であるランプがおいてある。後ろにある棚の中には蝋を入れるためのランプ等が並べられていた。因みに椅子は木の椅子ではなく、中に綿の入ったふかふかの高級椅子だ。

仕事の書類は部屋の一箇所に固められており、横2メートル縦1メートル程の紙の台ができている。その台の周りには何冊もの本が詰まれており、その様子は見る人が見れば心底嫌なため息を上げる光景だろう。

そんな事務室にいるのは一人の女性。
背中まであるさらさらした濃茶の髪を首の後ろで束ね、一本の長いおさげにしている。整った美貌はどこか悩ましげだ。
丸眼鏡を掛けて、書類に目を通し、右手に持っている羽ペンで書

類に文字を書き、書類を抑えている左手で持っている判子と印鑑を押して、その書類を机の隅に置く。その一連の動作は手馴れているようで流れるような作業だった。

彼女はエスシャナ・ルナル・ヘレゲナート・ラス・シェロウ。このシェロウ王国の第二王女だ。

エスシャナはふうと息をついて、掛けていた丸眼鏡をはずして目元を親指と人差し指の二指で押さえる。そして両手を後ろにやり、束ねていたお下げをはずし頭を横にぶんぶんと振る。さらさらした彼女髪は、それに合わせて流れるように揺れる。

「進まないなぁ……」

彼女の今日の仕事の進み具合はいつもより悪い。

先程まではいつも通りだったのだが、あの神殿での光。何かあったに違いなかった。そして自分の中にある神力が自分に何かを知らせるかのように軽く乱れている。

喜んでいるといったらいいのだろうか。エスシャナにはよくわからない。だが、確実に何かが起きているのだろう。この考えは間違いないと彼女は確信していた。

その証拠にさっき窓から下の状況を覗いた時、どこか神官達は慌しそうだったし。

（――――――もしかしたら）

エスシャナは再びペンを持った右手をそのまま口に当てて考え始める。

これは希望中の希望。万分の一、億分の一よりも低い確率。

だめだだめだと首を振る。この希望が外れた時の落胆は、その振り幅の差だけ大きくなるというのを自分に言い聞かせる。だが、彼女はどうしても期待してしまう。
その億分の一の確立に――――。

「――――ちゃー……！　――――ナちゃーん！！」

誰かの声が遠くから聞こえ、エスシャナは意識をはっとさせる。
この声は――――彼女か。

ということは、矢張り。
エスシャナが再び意識を思考の方にやろうとしたところで、突如。

バン！

部屋の扉が音をたてて開き、それに合わせて誰かが室内に飛込んで来て――――

「あ、止ま――――」

――――そのまま積んであった本と紙の中に勢いよく頭から突っ込んでいった。

部屋の中をパラパラと舞う紙の内、椅子に座っている自分に当たりそうな紙だけを置いてあった羽ペンで払い、この惨状を巻き起こした人物――上半身は紙の中に、紙の中から出ている足はばたつかせている――を見てため息をつき、部屋に入ってきた人物に声をか

ける。

「……で、どうしたんですかマルー。報告をしに来たんでしょう？
早くして下さいな」

そのマルーと呼ばれた者は、がばと両手を紙束につけて上半身を持ち上げ、そのまま立ち上がる。
そのせいで更に多量の紙が空を舞い、彼女は再びため息をつく。が、その元凶は気にしてないようで、全力でここまで来て崩した息を整えるために肩を上下させながら喋り始める。

「そうそうエナちゃんエナちゃん！　大変大変大変なんだよ！！」

マルーと呼ばれた少女の名前はマルベリテ・アルウィ・シテフシモン。

シェロウの配下である神官達の最高権力者であり国を代表する巫女だ。
その小ぶりな様からは可愛らしいと感じられ、ボブカットにされた髪の毛は、赤みがかった濃茶の色をしている。首から下全体を覆う服を着ており、その年始相応に服の上へ主張している胸と、細くくびれた腰辺りには、縁と複雑な紋様を金細工で飾られ、下側の二角には黄色い紐をぶら下げた薄い紅いプレートをつけている。
唯一頭部とは別に、肌を覗かせている両手の内の右手首には、国宝級の魔道具であるブレスレットが填められていた。

他の神官とは全く違う少女の格好、これがシェロウ国の巫女の正装だ。

エスシャナはマルベリテから扉の前にいる彼女のために在る、マ

ルベリテの従者の方に視線をやると、すまなそうな表情を浮かべていた従者はその視線に合わせて頭を下げ、彼女に礼をする。
その従者達に大丈夫だと手をやり、再びマルベリテの方に目を向ける。

「大変なのは十分に分かっているつもりです。で、何が大変なんですか？」
「それはね！　なんとね！」

マルベリテは興奮を抑えきれない表情をとり、その表情のまま小走りでエスシャナの机まで近付いて、両手を力強く机に音を出して叩き付け、身を乗り出して彼女に話しかける。

「来たんだよ！　この国に！」

一瞬、反射的に「何が」と言いそうになったが、国の巫女・神殿からの光・そして少なからずある自分の神力と勘から、すでにもしかしたらと予想はしていたのだが、彼女の反応で確信できた。
億分の一よりも低い確率――――。
まず、間違いない。

つまり、来たのだ。

「そう……です、か」

エスシャナは自然と笑みが浮かぶ。
その表情は、まるで面白くなってきたと言わんばかりに。

「そうだよ！　〈英雄〉様が来たんだよ！！」

シェロウ国の姫の職場に、マルベリテの明るい声が響く。

◇

扉を開いた瞬間、視界を光で覆われた神也が、眩しさを感じなくなった所で目を開く。

「……おー」

目に飛込んできたのは再び白い色。
ただし先程までの完璧な白ではなく、薄く灰色を含んでいる。

「……遺跡か何かかな？」

床や壁は溝一つ無かったものではなく、白い石のような素材で出来ている。そしてその石材も年月が経っているのか所々ヒビ割れている。が、誰かが定期的に掃除しているのか埃は積もっていない。
人が来ているという証拠に、神也の目の前にある台座には枯れていない一輪の紅い花が、口が細い深い青から綺麗な翠色のグラデー

ションをした花瓶に生けられている。
太陽の光が差し込み、ランプ一つ無い空間には明るく染まり、物音一つ無いこの場所はどこか神々しさを感じられて、神也は意味もなくほうと息をはいた。

どこか感動しながら周りを見回してみる、胸の前で両手の指を絡ませて拝む様な姿勢をした女性や、両手剣を持った男などが彫られたいくつもの石柱が、神也を取り囲むように建てられており、その全てが神也のいる方向に向かれていた。
石柱同士の幅はどれも3メートル前後の間隔だが、神也の正面には石畳の道が続いていて、そこを間とした石柱の間隔だけはその倍はあり、その奥には出口だと思われるものが見える。

（……あれ？）

ふと足下を見てみると、神也の足元、いやそれより広い範囲に文字のようなものが彫られている。

（これって……）

神也はどこか気になった様子で、そこに腰を下ろしてその文字を調べ始めた。

神也が遺跡を調べ始めて暫しの時間が経つ。その間神也は遺跡の地面に彫られている文字を全部を調べてみたり、石柱に触ったりしたり、生けてある花や花瓶を調べていたりしていた。
因みに、神也が調べてみた生けられている紅い花は今まで自分が

見たことが無い花だった。
植物の種類について詳しくは知らないが、多分この世界の植物だろうと神也はあたりをつける。

――――初異世界植物だ。

神也のテンションは右肩上がりのまま上昇していく。

◇

それからさらに時間が経ち、神也がそろそろ一休憩しようと、腰を落としたまま息をついた。
そのまま蹲って視線を地面に落としていた時に。

「――――お待ちしておりました。〈英雄〉様」

前方から、声がかかる。
神也はすぐさま落とした腰を再び上げて、前方にいる人物を確認する。

そこにいたのは全部で１０人。神也に向かって１人の女性を先頭

に三角の形に並んでいた。
先頭に立つ、さらさらしてそうな濃茶の髪を下ろしている美しい女性は、様々な細かい刺繍をした白を基本色にした見ただけで上質とわかる高級そうなドレスを着ており、頭の上には金で飾ったティアラをしている。
その左斜め後ろに立っている女性――、多分年齢は神也より下だろうと思われる小ぶりな少女。
ボブカットにされた髪の毛は、赤みがかった濃茶の色をしている。首から下全体を覆う服を着ており、その服は縁と複雑な紋様を金細工で飾られ、下側の二角には黄色い紐をぶら下げた薄い紅いプレートをつけていた。
下から見えた彼女の片方の手首には、銀に装飾された、紅く輝く宝石をはめたブレスレットが填められていた。

さらに、彼女の後ろには幾人か人が見えるが、その様子はわからない。
ただ、その少女とは逆側にいる神官らしき格好――白の上に赤十字らしき太い線を引いている貫頭着と胸に勲章のような物を付けている――をした顔に髭を濃く生やした見た目三十代後半程の男性は１９０以上はあるだろうと思われるその高さゆえに、神也からよく見ることが出来た。
そして彼はその顔にしわを寄せて神也のことを見ている事だけはよく見える。
むしろ睨んでいる。

なんでだ。

彼を少しだけよく見てみると、その男性は更に皺をよせて神也を睨んでくる。
しかし神也にはその睨まれる事をした覚えが無い。此処を調べて

たのが拙かったのかな。と思ったが、同じ格好をした他の人は全然怒っている雰囲気は感じられない。
神也には訳がわからない。あまりにも意味が分からなかった為、神也自身あんまり彼に関わらないようにしようと神也の内心で彼との接し方が決定する。
彼より奥の方の人は余り確認できないが、赤や白い色が見えたのできっと彼と同じ格好をしているのだろうと踏む。

一通り大雑把だが確認し終えた神也は、とりあえず自分に声を掛けたと思われる、先頭に立っている貴族らしい少女に声をかける。

「え……と、あなたは？」

すると微笑んでいた彼女は少しきょとんとして、すぐに「ああ」と言って表情を元に戻し、

「失礼致しました。私はシェロウ国第ニ王女――エスシャナ・ルナル・ヘレゲナート・ラス・シェロウ、と申します。〈英雄〉様にはこれからお世話なる身、どうかよろしくお願いいたします」

その自己紹介を聞いた神也は目を見開いて驚きを隠せない。何せ目の前にいる女性はどこかの国の姫なのだ。
この世界に来る前に神様の家で様々なパターンを予想していた神也だったが、まさか一国の姫がお出迎えという基本中の基本、もっともベタな展開だとは想像していなかったのだ。
そしてそれほどまでに自分達の存在が重要視されていたとは思っていなかった神也は、心の内で警戒を高める。もしこの国や世界が腹黒かったら、言葉一つでも何が落とし穴か分からないからだ。

「エスシャナ……姫、ですね。……あの、失礼ですが、御世話とは一体？」

神也はこの世界の事は何一つ知らない。

事前情報はここが所謂魔力という力や亜人がいるファンタジーな世界らしいということだけなのだ。神様もそれ以上の事は話してくれなかった。いや、出来なかったのだろう。そうだと思いたい。

この世界の事は何一つ知らない。

つまり、もしかしたら言葉だけで成り立ってしまう契約させる魔法もあるかもしれないということだ。自分がそれを知らないだけで。それが主従契約や国の騎士ならまだいい。最悪、隷属の契約もあるかもしれないのだ。気軽に“はい”や“わかりました”等の肯定の言葉は言えない。

エスシャナは困ったような表情を神也に向けて口を開く。

「あら、此方は名乗ったのにそちらのお名前を聞かせてくれないのかしら？　失礼なお方ですね」

そう言いながらも、手で口を隠してくすくすと笑っているので怒ってはいないようだ。

内心安心した神也は起立した状態からエスシャナに向かい方膝を着いて、頭を下げる。

「失礼致しましたエスシャナ姫。私は神也と言います。只今の無礼を、どうか御許し下さい」

とりあえず自己紹介だ。これ以上一国の姫相手に失礼は出来ない。

下手をしたら手遅れかもしれないが。

「わかりました。カミヤ様、と言うのですね。ではカミヤ様、そんなにかしこまらないでお顔をお上げ下さい。そんな態度を取られてはこちらが困りますわ」

すぐに神也は顔を上げる。視界には、微笑んでいる彼女の顔が見えた。

「普通に立って下さいな。それと、わたしの事は気安く、エナと呼んでください。そうだ、そうしたら先程の無礼を許しましょうか」

「へ？」

神也は予想外の言葉を聞いて変な声が勝手に口から出る。

一国の姫を呼び捨てで呼ぶ？

それはいろいろなイベントを消化した後に言う言葉じゃないのか。

「姫様ッ？！」

「エナちゃん！？」

巫女らしき女性と、彼女の左後ろにいた神官の内の一人、ずっと神也を睨んでいた濃い髭の男性が太い大声をあげるが、エスシャナはそんな声など意にもかいさない。それよりも巫女っぽい彼女のちゃん付けは良いのか、と神也は思った。

「いいわね？　エナと呼びなさい」

「あ……あの……？」

「姫様ッ！　そんなこと———貴様ッ！　分かってるな！？」

「カミヤ様、彼の言葉は気にしないで下さいね。で、返事は？」

一国の姫とその神官はどちらも凄い気迫だったが、表情は微笑んだまま威圧感をだしている彼女の方が神也は怖い。

「……わ、わかりました？」

「よろしいです。では」

「姫さ――」

「いい加減五月蝿いですモハじい。黙っていて下さい。寧ろ黙りなさい。…ではカミヤ、練習です。早速私の名前を呼んでみてください」

あっ、石になった。

あといつの間にか呼び捨てにされてる。さっきまでのえーゆうさまかみやさまはどこに消えたんだろう。さっきまでのは他人行儀だったのか、当たり前だ、じゃあ今は何だ。と、現実逃避している神也に彼女は歩み寄り、顔を両手で挟むように掴み、その魅力のある顔をぐいと近付けて神也の顔をのぞき込む。

「ほらどうしましたカミヤ。早く呼んでくださいな」

「……えー」

「えい」

「ぶぅぃ」

エスシャナの掛け声と共に、神也の頬に当たっている手袋の感触がより強く伝わり始める。

結果、神也の頬はむぎゅと潰され、変な声を上げてしまう。

「てや」

彼女はこねくりこねくりとそのまま両手を神也の頬を挟んだまま

上、右、下、左と回転させるように動かす。
その彼女の表情はやはり微笑んだままだった。先程とは違い、どこか楽しそうだが。

「むぎゃー」
「カミヤ？　呼ばなかったら許しませんよ？　後で痛いですよ？」
「フェナふぁん！」

とりあえず痛いのは嫌なので叫ぶ。
頬を挟まれてこねくり回されていたので、まともに発音できなかったが。
というよりいつまで自分の頬をこねくりしてるんだろうこの人。

「さんは要りません」
「フェ、エナ……？」
「まあ、よろしいでしょう」

不満気を隠さずに唇を尖らせながら彼女は「良い揉みごたえでした」と言ってから神也の頬から手を放し、部屋の出口へ向かう。彼女は出口の前まで来た所で再び振り返り神也に催促した。

「こっちです。ついて来て下さい」

◇

グシト地方を治める国シェロウ。
その王都には当然だが国の王が居る王城が建てられている。が、其処から離れた第二王女の住処である場所、都市フルケレナ。そこにそれと同じ位重要な建築物がある。

【神の子の神殿】

この神殿は、何時どの時代から建てられているのかを誰も知らず、歴史学者達の一説によると、世界創成の際に神が建てられたという。
なぜなら、この神殿に使われている石材は何をしても傷がつかず、風化もしない。正に神の素材で出来ているからだ。土工族(ドワーフ)達や、魔術者・学者達が長い年月研究しているが、今だその素材の粗悪品すら出来ていない状況だ。

また、そういう歴史等の貴重価値としてだけではなく、この神殿にはもう一つ重要な価値がある。
それは、＜神の子の神殿＞が〈英雄〉の召喚される場所だということだ。
〈英雄〉の存在は他国にとっても自国にとっても非常に強力な存在である。その存在が自国の神殿に召喚されれば真先にに手中に収められるのだ。このアドバンテージが神殿の重要性を示していると言ってもいいだろう。

「へー、この建物ってそういう物なのです…なのかー」
「そうなんですよ」
「ていうか随分と生々しい説明を受けまし…たけど、いいの？　そんな説明して」

神也たちが歩いている場所は神殿の廊下、神也が先程までいた部屋から神殿の出口までを繋ぐ一本道である。
石畳の床にはレッドカーペットが敷かれ、道の脇には沿うように、石柱が何本も建てられている。その石柱には先程まで神也が居た部屋のように何かしらの像は掘られておらず、全てが同じ柄をした石柱のように見える。

先程、神也は前を歩いている彼女達に着いていく形で歩いていたのだが、五十メートル近く歩いた辺りで、急にエスシャナが自分の横に近付いてきて、

「この神殿の事を知っています？」

と、聞かれたので、少しでも知らない事は知っとこうと、差し当たりのないように肯定の意を返して、この神殿の事を聞いていたのだが、随分と――これでも軽い方だと思うが――生々しい話を聞かされたのだ。

御世話の意味は、どうやら悪い方の予想で濃厚のようだ。そう神也は彼女の話からそう当たりをつけた。

「何か問題でも？」

彼女は顔色一つ変えずに――――――

「これからカミヤには御世話になるんですもの。後で騙されたと言われて〈英雄〉に不機嫌になられたり裏切られたりしたら元も子もありませんわ」

――――――微笑んだまま淡々と語る。

さも当たり前のように。

神也は少し位そういう事を隠す気は無いのかな。と思いながら今の言葉で気になった事を彼女に聞く。

「裏切る？　裏切れないように無理矢理そういう系統の契約等はしないんですか？」

「ええ、どこかの国では極稀にそういう事をするところもあるとありましたが。私達シェロウは一切しないので安心してください」

（他の国？　ということは他にもこの神殿はあるのか）

彼女の話を聞いて、頭の中で推測しながら成程。と思いつつ、神也は会話を進める。

「ん…私達は？」

そう、まるでこの言い方では、彼女達は自分の存在をこの国に束縛しない言い方ではないか。

神也の質問を聞いたエスシャナはにこりと笑う。

「はい。私達シェロウの民は、貴方様〈英雄〉を一般の民として貴方を向かい入れようと思っています」

「……というと？」

「あ、勘違いしないでくださいね？　決して私達が〈英雄〉様の存在を無下にするわけでは無いということです。例えば、貴方が豪邸を欲しいと望めば、すぐに出来うる限りの手を尽し、ご希望に沿った豪邸を用意しましょう。つまり、貴方が特別待遇を望むのならそのようにし、平穏な日常を望むのならば、なるべく貴方を頼らないようにも取り計らいます」

そこまで言ってエスシャナは一息つき、もう一度口を開く。

「ただ、どうしても貴方でないと駄目な依頼や状況になった時だけ、その時だけ力を貸して下さい。そこだけは、どうかよろしくお願いします……！」

そう言い、彼女は頭を神也に向けて下げた。

「っ……」

一国の姫である者が得体の知れない一般人に礼をするというのは仰天する所なのだろうが、回りにいる者達はその事に注意を入れることなく、彼女に合わせて頭を下げる。巫女のような彼女も、神也を睨んでいた男性も。

そしてそれを受けた当人、神也はその説明と動作に困惑もしたが、寧ろしてやられたかな、とも思っていた。

他国での自分の待遇を知らせた後、自国での自分の待遇を知らせ、自国の待遇が如何に好条件かを教えさせる。

神也が何も知らない事を承知した上での発言だ。

更に姫達による頼み。多少話の流れは不自然だったが、これで殆んど考える時間を与えずに答えをもらう。そして此処で神也が否定

の意を唱えても、多分彼女の言った通りに他の国では犬のように扱われるのだろう。しかも既に本名を言ってしまったし、なにより顔を見られている。名前までだったら偽名で何とかなったかもしれないが、国を通して指名手配されたら後々生活する事が面倒くさいどころではない。

というより、自分がどうしようもない屑のような性格だった場合どうしたのだろうか。さっき出会ったばかりの存在をここまで買うなんてこの国の将来は大丈夫なのだろうか、と心配してしまう。

好意か故意かは分からないが、もしも策略だとするのならばこの話し合いの結論は、既にエスシャナが神也に神殿の事を話し始めた時に決まっていたのだ。

だが実はこの状況、敗北寸前の神也にとってこの状況は切り抜けられない事はなかった。

なぜなら、彼女達は一つ根本的に勘違いをしているから。

「あの、非常にすみませんが……」

神也が断りの言葉を話し始めると、彼女達全員は顔を上げて、信じられない。といった表情で神也を見る。

だけど、神也は動じない。こっちだって安全な住居がいくつか欲しいし、策略の一部だとしてもその頼みを受け取ったって良かった。

しかし、違うのだ。

神也だって騙されたといわれて後ろから切られたくもないのだ。いや、もしかしたらいますぐ切り伏せられるかもしれないが。

「貴様ッ！！　姫様の好意を無下にするというのかッ！？」

先程モハじいと呼ばれた男性が、そのガタイの良い体格を奮わせて、怒りを露にして怒鳴る。これには流石に神也は肩を震わせた。ついでにと巫女らしき少女も、しかも少女の方は少し涙目になっていた。

彼は怒りの表情をしたまま、腰に挿してある杖に手を伸ばす。が、それをエスシャナは手で制し、神也に不満気な表情で問う。

「なぜ？　なぜ駄目なのでしょうか、理由を聞かせてください」

何かされるかされないかで内心びくびくしていた神也だったが、とりあえず話し合いになりそうでほっとする。

そして一度大きく深呼吸をして、言う。

「あのですね、皆さん。いくつか理由はありますが、僕自信も騙されたと言われたくないので言っておきますが、貴女方は大きな勘違いをしています」

彼女達は一つ根本的に勘違いをしている。

そしてその勘違いは究極的に問題があるのだ。

この話し合いを先伸ばしにするどころか、無かった事になる程に。

「僕、弱いんですよ」

途端、神也を除いた一同に困惑の表情が浮かび、中には苦笑いしている者もいて、彼等の中で「まさか」「そんな」と軽いざわめきが走る。

エスシャナも苦笑しながら「ご謙遜を」と言う。その額には少し汗が見えた。が、神也は首を横に振り――――――

「はっきり言いますけど。僕はそこら辺の兵士さをより弱い、唯の一般人です。あまりこの世界の事を知りませんがこれには情けない程に自信があります。賭けたっていいです」

――――――そう断言して口を閉じる。

石畳の廊下に沈黙が訪れ、気不味い雰囲気が拡がった。

「……嘘」

その沈黙を破った第一声は、マルベリテの呆けて、丸く開いた口から発せられた。

01ー（後書き）

あ、よせは策略とか交渉とか考えることすらできない人です。んなこと考えたら脳内爆発します。故にここはこうした方がいいんじゃないか、とかこういう策略があるんだけど、とか意見、アドバイスがあったら是非いってください。

がんばって吸収しますので。（何を

０２ー（前書き）

２６ＫＢはあるそうな。
二日でがんばったほうですよね。
次の更新少し遅くなると思います。読んでくれてありがとうございます。

02―

都市フルケレナのシンボルであるフルケレナ城。
その内の会議室である事が掘られた金属プレートを出入口の上に飾っている部屋の中に、この都市の重要人物であり、最高位の権力者である者達が集まり、緊急会議を開いていた。

十メートル四方の部屋には大きく赤いカーペットを敷いて、その上に大きい円形の机が置かれている。円卓に囲んで数名が座っており、各人の前には既に空になっているのもあるが、飲み物が入っている貴金属のカップと、いく枚かの書類が配られている。
部屋に居る者は４名、その中には当然だがこの国の第二王女エスシャナの姿もあった。

「困りましたね」

エスシャナは書類を片手に皆を見渡して、言う。
彼女は先程の白のドレスのままだが、書類を掴むのに邪魔なのか、手袋は外して円卓の上に置かれている。

ため息をつくエスシャナの正面に座っている老人が口を開く。

「呼ばれた〈英雄〉に力が無い……ということですが、それは本当の事ですかな？　姫様」

エスシャナは静かに「はい」と答えて首肯する。

「どうやら彼、カミヤ……いえ、カミヤ様という〈英雄〉は、どう

やら本当に何も力が無いようです」
「根拠は？」
「巫女による神の判別です。結果は白。つまり、一般人レベルですね。彼の断言した通りです」
「ふむ、魔力の方は？　巫女を疑う訳ではないが、他にも調べる方法はあるじゃろう？」
「神の判別の他に、この国での魔水晶、リュテミス王国の魔水晶の下級から上級・特級全てを試しましたが、全て一般人の平均値を示しました」
「魔水晶の故障はない、ということか……」

むう、と老人は唸り、次にその右隣に座る若い中肉中背の男性が口を開いた。

「そのカミヤ、と名のっている少年は本当に〈英雄〉なのでしょうか？」
「ツェンドルフ、それはどういう意味だ？」

ツェンドルフと呼ばれた彼に口を開いたのは、神官の貫頭着を着ている濃い髭の男。
先程エスシャナにモハじいと呼ばれた彼だ。

「そのままの意味ですよ。その〈英雄〉は本当に〈英雄〉なのか、ということです。もしかしたら自身を〈英雄〉と言う唯の平民かもしれないじゃないですか」

ツェンドルフは肘を卓上に乗せ、両手を組んで鼻の前にやる。両腕で大部分が見えなくなったその口元は笑みを作っていた。

エスシャナは彼に説明する。というより、まるで言い聞かせるか

のように話始める。

「ツェンドルフ、確かにそれは私達もそう思いました。」

そう、エスシャナ達も彼、カミヤの余りの一般人過ぎる結果にそう疑ったのだ。しかしその考えはすでに無い。

「しかし、彼は間違いなく〈英雄〉でしょう」

「根拠はあるのですかエスシャナ様？」

ツェンドルフは少し眉を寄せてエスシャナに問い、それにエスシャナは頷き、妙齢の男に説明を促す。

「あります。リモスバッハ」

「わかりました姫様」

リモスバッハ――妙齢の男は彼女の方を見て促き、次に書類の一枚を手に持って説明を始める。

「私達が今話している彼、カミヤ殿はシェロウ国第二王女エスシャナ・ルナル・ヘレゲナート・ラス・シェロウ様、巫女のマルベリテ・アルウィ・シテフシモン、及び彼女の従者の2人、それと大神官である私ことリモスバッハ・アルウィ・ステグテーダ・ロッジと神官5人。計10名が＜神の子の神殿＞の＜英雄の間＞に行きました」

そこまで言い、リモスバッハは一息ついた。

そして直ぐに説明を再開する。

「私達が＜英雄の間＞に着いた時、カミヤ殿は《神子召喚陣》の内部に居ました」

「《神子召喚陣》？」

ツェンドルフが怪訝な表情をし、リモスバッハの説明に口を挟む。
リモスバッハは一度説明を止め、それの説明をしようとした瞬間、先に隣に居る老人が彼よりも先に説明をする。

「＜英雄の間＞の床に掘られている召喚陣のことじゃよ」
「〈英雄〉を呼ぶ召喚陣ですか……」
「そう、〈英雄〉を呼ぶ神の魔術陣。まあ、“召喚”と言われておるが、正確には〈英雄〉が此方の世界に来る為の出口。と言った方がいいかのう」
「……それはどういう違いが？」

ツェンドルフは益々怪訝な表情を浮かべ、老人は気にせず笑って続ける。

「ふぉ、つまり〈英雄〉は此方から呼ぶことが出来ないんじゃよ」

〈英雄〉を呼ぶ陣、《神子召喚陣》。
その陣からしか〈英雄〉は現れない。
それは、異世界からこの世界（異世界）への一方通行の通り道。
此方が〈英雄〉を召喚出来るのではなく、彼方から此方に召喚される。出来るのではなくされる。
いわばあの陣は〈英雄〉という存在を受信しかできない郵便受けだ。

そして、と老人は話を続ける。

「そしてその陣はあの神殿に直接地面に刻まれている。つまり、」
「あの“神の素材”に直接刻まれているのか」

「そうゆう事じゃな」
「ふむ、それは知らなかった」
その話に関心したようにツェンドルフは頷いた。が、
「だが、それが何の根拠になるんだい？」
そう、陣の事はわかった。だが、別にそれが彼の素性の真否の根拠とはならないはずだ。
「ふぉ、まあ話を聞けいツェンドルフ。まだ話は終わってないぞ」
老人は独特な笑いをしながら、ツェンドルフに説明を再開した。
「とりあえずその陣が、唯の魔術陣ではないということは理解できたろう。ただな、更にこの魔術陣には仕掛けが施されているのだよ」
「仕掛け？」
「うむ。まあこれは自然にそうなったと言うべきか……。とにかく仕掛けじゃ」
「……成程。その仕掛けが根拠と」ツェンドルフは納得した表情をして、老人に続きを求めた。「では、その仕掛けとは一体？」
老人は満足そうに頷く。
そのころ、リモスバッハは説明役を取られて少し残念そうな顔をしていて、エスシャナは手で口を隠して欠伸をしていた。
「うむ。ところでツェンドルフ、お主神力と言うものは知っておるよな？」
「ええ、原因不明の魔力とも氣力とも違う力のことですよね。一説では英雄の血族である者が持つ力だとか」

そう言って、ちらとツェンドルフは彼女を見るが、エスシャナは特に気にすることなく渡された資料に何度目かの目を通している。視線を元に戻す。

「その通りじゃ。まあ、何が原因かはまだ分かってないから余りそういう噂は鵜呑みにしてはいかんぞ。ふぉふぉ、世にはわからない事だらけじゃ」

老人は嬉しそうに笑い、そして直ぐに表情を切り替えて、真剣な表情をする。

「と、話を戻そう。その神力じゃが、実は神殿の内部とその《神子召喚陣》には神力が常に溢れ出ておるのでな、その神殿の中に入るだけでも、神力を持っていない者はその神力に気を当てられてしまうのでな」

「成程」

「何より重大なのはその神力の濃度の違いじゃ。神殿から溢れ出ておる神力はかなり微妙なものなのじゃが、魔術陣の内側ははっきり言うて桁……嫌、次元が違う。陣の内部には姫様や巫女ですら入ることは出来ないのじゃ」

「巫女ですらですか。因みに神力の影響……それはどれ程」

「神殿内部は気分が悪くなり、段々と症状が酷くなり始める。まあ引き返して外に出れば治るのだがな。しかし魔術陣内部の神力は、一歩。神力が一定量無い者が一歩踏み込むだけで気が触れて、死ぬ」

ツェンドルフはその内容に顔をしかめた。

「……それはまた悲惨な」

「ふぉ、廃人となる暇すらないんじゃよ。狂って、直ぐに、自殺を

図る。悲惨さを感じられる隙間さえない。ただそれだけじゃ」
「……」
一瞬、ツェンドルフは何かを言おうとしたが、すぐに開きかけた口を閉じた。彼の何かを悟った様な、独特の重圧感に気圧されて。
「……とまあ、〈英雄〉は誰彼皆それに耐えうる神力か何かを持っているということじゃ。そうじゃろう？　リモスバッハ」
老人はそこで話を止め、リモスバッハに確認を促し、それに彼は頷いて応じる。
「ええ、ヤード老の説明の通りです。また、カミヤ殿には、〈英雄〉が持つとされる『神器』の存在も所有していたので間違い無く〈英雄〉かと」
「神器？　ああ、神が英雄に手渡したという道具のことですか。それは一体どういう形状なんです？　伝説の剣の形とかしてるのですか？」
神器という単語を聞き、ツェンドルフは見るからに興味津々といった反応だ。
リモスバッハはちょっとうんざりした顔をして、ため息をつく。
「……お前さんは一々話の腰を折るな……」
「別にいいじゃないですか。急いでるわけでもないですし」
「急いでるから“緊急”会議なのだが……。まあいい、カミヤ殿の神器は……小さな四角い箱だ。巫女の確認もある。」
「小さくて四角い箱？　なんですかそれは」
ツェンドルフは興味津々の表情を崩して訳がわからないといった

表情になってしまう。
実際、リモスバッハも理解できていないのだろう。彼も苦い顔をしている。

「さあな、俺も知らん。なんでもケータイという神器らしいぞ」
「……神器、ケータイねぇ……もしかしたらどっかから奪ってきたりして、それ」

その言葉にリモスバッハは首を振った。

「ツェンドルフ。お前は全てにおいて平均値かそれ以下の結果を出している彼に、他の国で有名な〈英雄〉を殺せるか、奪って逃げられるとでも？」
「ですよね」

リモスバッハの言ってることは結構酷いのだが、実際その通りだったので、エスシャナも「そうですね……流石にあれでは」と相槌を打つ。
本人がこの場に居たら多分落ち込んでいる姿が目に浮かぶ。

彼も本気で言った訳じゃあないのだろう。ツェンドルフは苦笑しながら答えた。

「――さて、一応カミヤ様が〈英雄〉ということを分かって頂いた所で会議を進めましょう」

彼がこの世界、この国に来たのが原因で開かれたこの緊急会議。
その目的は。

「私達は、カミヤ様にこれからどう接するかです」
「……唯の平民として扱えばよろしいのでは？」

ツェンドルフがぱらぱらと渡された資料の紙をめくりながら言う。

「いや、それでは折角の〈英雄〉の到来。余りにも惜しいだろう」
「そうですね。戦闘能力が皆無だとしてもあくまで〈英雄〉。無下にはできません」

戦闘能力、とヤード老は何かに気付いたようにぽつりと呟く。

「戦闘能力と言えば、彼に支援能力とかは無いのか？　隠しているとか」
「その可能性は高いのですが、本人からの証言等からは報告はありません」
「ふむ、まあ彼にはその線を望みましょうか。使える能力だといいんですけどねぇ」

ツェンドルフはそういえば確認したいのですが、と言葉を付け加えて、この場に居ない少年と少女の事を聞いた。

「その彼は今どこに？　まあ巫女の彼女もこの場に居ないのということで予想はつきますが」
「そうですね、今はマルベリテはカミヤ様の側につかせています。今頃は彼女の部屋にいるのではないでしょうか」

エスシャナはこほんと咳払いをする。
「もちろん従者と一緒にですが」
「成程」
そこで一拍間を置いて、ヤード老が軽く咳払いをして会議を再開させる。
「そうじゃのう。とりあえずカミヤ、といったかの、その少年。彼はとりあえず欲を振り撒く人物ではないのだろう？」
その問いかけにエスシャナは頷き、
「その通りですね。私が“視”たところ、そういうお方ではありませんでした」
「うむ、だからこそ姫様があの条件を出したのです。お二人方」
リモスバッハもそれに同意を示す。
「ふむ。とりあえずじゃが此処に置いとく事でいいのではないかの、聞けば本人も承諾しかねておるのだろう？　返事を待つという名目で滞在させても問題なかろう」
「私もそう思います、エスシャナ様。まあ少しくらい条件をきつくするとかはした方がよろしいかと」
「私は特に否定の意はありませんな。意見するならツェンドルフと同じですが」
「……では概ねその通りにしましょうか」
そこまでで一端カミヤの話は終了らしく、エスシャナはリモスバ

ッハに新たな資料を渡すように指示し、それが皆に渡ったのを確認してから次の問題に移行しようと――――

「次に、下手をしたら此方の方が重大になるかもしれませんが、お父様の――――」

「リモスバッハ殿！　緊急事態です！」

――――したのだが、乱暴に会議室の扉が叩かれる。

リモスバッハは一言「失礼します」と言い席を立ち、叩かれている扉の方へと向かう。

「何事だ！」

と、会議室に怒鳴り声を響かせて、扉を開くとそこには槍を腰に携えた兵士がおり、肩を上下させて息を整えていた。

リモスバッハは眉間に皺を寄せ、その兵士に口を開く。

「どうした？　緊急じ」

「エスシャナ様！　リモスバッハ様！　城内に侵入……者？　とりあえず侵入者です！！」

その兵士は、彼の声を遮って大声を出し、侵入者の報告を伝えた。ただ、途中これでいいのだろうか、といった表情をしたが。

「なんだと！　糞ッ！　＞英雄＜の到来を感づかれたのか？！」

と、その報告を聞いたリモスバッハは声を荒げ、奥にいたツェンドルフはその少し他の人より細い顔を顰めて舌打ちをし、ヤード老とエスシャナは緊張した表情を浮かべている。

「どこの奴だ！　素性確認出来ているのか！？　一人でも巫女の部屋等に行かせるなよ！　ここには今姫様だけでなく〈英雄〉も居るのだ！」

リモスバッハは荒げた声を更に大きくし、報告に来た兵士に怒鳴る。

その声に肩を震わせた兵士は、急に困った表情を浮かべて恐る恐る口を開いた。

「いえ、それがまだ……」

「なんだと！？　ここの警備はそんな甘くは無いはずだろう？！」

確かに、ここの警備は他の都市よりも格段に厳しい。だが、その警備も〈英雄〉や二つ名が来た場合は、抜けられるとも限らないのだ。その考えに達したリモスバッハはその兵士に尋ねてみたが、

「いえ、それが……」

とあいまいな返事しかしない。

どうにも要領を得ない、それに危険ならば他の兵士もそろそろここに来てもいい頃ではないのか。とリモスバッハ達が疑問を感じ始めたところで、

「あの、エスシャナ姫はいますでしょうか……？」

神也に一緒にいさせている少女の従者の内の一人が、会議室でヤード老と何が起きたのか相談していたエスシャナのことを、兵士の後ろから呼ぶ声を出した――――。

それから少し経ちエスシャナとリモスバッハは事務室から去り、会議室に居るのはツェンドルフとヤード老だけとなる。

しばらく黙っていた二人だったが、ヤード老がツェンドルフに口を開く。

「……のうツェンドルフ」
「何でしょうかヤード老」
「……ちょっと見てみたかったのぅ」
「……ですね」

二人はなぜか羨ましそうな会話をして、二人は再び口を閉じて黙す。

そうして、会議室に何度目かの沈黙が訪れることとなった。

◆

フルケレナ城の城門前、そこには二人の兵士が門の前に立ち雑談をしていた。
二人は丁度同じくらいの身長で、体格も市民よりも筋肉のある体の上に、頑丈そうな分厚いプレートメイルを着用している。

「なあ、エスシャナ様達が緊急会議をすると神官達が騒いでいたが、あれは一体なんの騒ぎなんだ？」
「さあな、俺もお前と一緒に門番してたから分かるわけがないだろ」
「確かに」

そう言って門番の兵士達はお互いに笑い合う。
その様子を見たものは彼等が仲が良いという事を理解できるだろう。

「何が起きたんだろうなぁ」
「リュテミス王国から宣戦布告をされてたりして」
「それは無いだろう。一応あっちはあっちで忙しいだろうし」
「冗談だよ。じゃああの歌姫が急に来ることになったとかはどうだ」

歌姫――――
一年半程前に現れた、どこの国にも属さず、何処の出身かも分かっていない、正体不明の歌手。
様々な国に勧誘されるもそれを全て断っており、それはどんなに

好条件でも返事は同じだと言う。最近では、一国の王や＞英雄＜からの婚約や勧誘をも断ったらしい。噂では、どこかの宗教に属していると言われているが、その真実は定かではない。
その美貌もさることながら、何よりも素晴らしいのは彼女の口から発せられる美しい声だ。その声は歌を聞いた者全ての心を直接響かせられた。

彼女はこの国にも数ヶ月ほど前に来て、いくつかの都市を渡ってライブを開いていったのだった。
この二人もその時ライブに参加していてその歌声を聞いた。今でもその歌声の感動は思い出せる。

「歌姫か……。有り得そうな話でもないな」
「だろ？　ああ、もう一度あの声を聞きたいなぁ」
「けど、彼女は今違う国にいるときいたぞ？」
「え、それ本当か？　何処にいるんだ？」

どうやら歌姫に心酔している方の兵士は知らなかったようで、その言葉に驚いた反応をした。

「ああ、【ヒノクニ】だそうだ」
「へぇー、随分とまた」

兵士は何処か思う所があるのか何か含んだ返事をし、「じゃあ」と続ける。

「緊急会議ってなんだろうな。逆にいろいろありすぎて検討もつかねェ」
「……もしかしたら」
「うん？　言ってみ言ってみ」

「……〈英雄〉とか？」

すると言われた彼は固まってしまい、そして引き締まっても細身の体を震わせ始め――

「ぶはっ」

――吹き出した。

「はっはっはっはっ！　英雄ってお前！」

大笑いされている彼はちょっと恥ずかしそうだ。

「そこまで笑うこたぁないだろう」
「あー笑える。英雄かー確かに有り得そうで有り得ないだろうな」
「む、なんなら賭けてみるか？」
「おお。じゃあ夕飯でも賭けるか」
「いいぞ。なら俺は〈英雄〉に関する会議で」
「俺はそれ以外、と。悪いな、ご馳走様だ」
「まだわかんねぇだろうよ」
「俺の神からの判別さ」
「夕飯の為にお前の神は動くのかよ」
「朝飯昼飯間食夜食全てに動くぜ」

ぶはははっと、笑いながら話している二人に声がかかる。

「隊長ーー！　それ、捕まえてくれーーー！」

二人がなんだと声がした方に目をやると、そこには、こちらにかなりの速度でこちらに向かって飛んで来ている何かと、それを追い

掛ける神官や兵士の姿が幾人か見える。
神官達は何人か飛翔の魔術を使い、兵士の中には鎧を全部外して武器である槍や剣だけを持って飛行するそれの後ろを走っている。
まあ全員が笑ったりして必死になっているので、危険ではなさそうだ。
二人は顔を見合わせた。

「……どうしたんだろうな」
「……さあ、とりあえずあの先頭を走る、いや飛んでいるあれを捕まえればいいんだろう」
「そうだな」

互いに相槌を打ち、門に立掛けてといた槍の、矢尻の付いて無い方の先を標的に向けて両手で持ち、溜めるように足を大きく開いて腰を低く落とし、重心を低くして構える。
二人は丁度、門の中心を真ん中に左右対称になるような姿だ。

そして、目標物が槍の射程距離に入った瞬間に――

「ハッ！！」

――寸分違わず出した気合いの入った声と共に、飛んで来る標的に向かって左右対称に構えた槍を、弾丸の用につき出す。
打ち出された槍は、槍使いにとって一流と言っていいほどの速さを纏っており、ただの鳥や獣等は避ける以前に反応すら出来ないで槍に打ち抜かれるだろう。

が、しかし。

「！」
「なっ！」

二人は驚愕した声を上げた。
なぜならその標的は、一瞬だけ更に速度が上がり、左右の槍が届くよりも先に、彼等の間を通過していった。

だが、彼等の奥には分厚い門がある。こんな突風を残すほどの速さでは激突は免れられないはず――――。
そう思いながら振り返った彼等の視界には、先と変わらずどこにも何かが衝突した痕などない門の姿だ。彼等は首を傾げる。

「？」

次に視線を神官達に向けると、兵士や神官は皆上を見上げ、城の方に顔を向けていた姿が視界に入った。

「……？」

彼等も同じように顔を城にやるが、特に変わった箇所は、無い。

「……どうしたんだ？　というより追い掛けていたあれは何処だ？」

彼等は門番の正面から来ていたから、あの飛翔物体がどうなったのか見ていたはずだ。

すると、聞かれた兵士は指を城に向けて、言う。

「……門の上を通り抜けて……そのまま城の中に……」

「――って、マジか！？」

つまり、あの物体はあの速度を保ったままほぼ垂直に曲がったということ。それは予想外すぎる。

再び、二人は勢い良く城に振り向く。そして口を大きく開け声を上げ、

「侵入者だ！　数名は此処に待機、門を頼む！　他の各員は上部に報告と警戒体制を敷け！　もしかしたら何処かの国の攻撃かもしれん！」

「ハッ！！」

そう部下に指示を出して二人は門を開け、槍を腰に据えて城内を駆ける。

場内を駆けている中、一人の門番がもう一人に口を開く。

「しかし……」

「……どうした？」

「……あの飛翔してたやつ、ちょっとあれだったな」

「……だな」

そして彼等は城内のT字路で二手に別れ、彼等の上部の人間に報告をしに行った。

◇

「は一、そういう効果があったとはなー。あの神殿」
「そうなんですよ。故にカミヤくんが〈英雄〉というのはまず間違いないかと」

カミヤ達は神殿を出た後、城の内部で様々な検査――といっても水晶に手をかざしたり、マルベリテに神の判別という魔術っぽいことをかけられたりしただけだが――所でエスシャナとリモスバッハと別れ、マルベリテに連れられて城内にある彼女の部屋にいた。

二人は暫し無言で、それを二人の従者が無言で扉に佇んで見ているという中々にシュールで気不味い雰囲気だったが、出された茶菓子をカミヤが食べて、美味いと絶賛したところ、その茶菓子は彼女の大好物だったようで会話が弾み、そのままなんとか打ち解け合って神殿の話になり、今に至る。

因みに従者の方は、一人は先程彼女が部屋から無くなった茶菓子

を取りに行かせ、もう一人は部屋の扉の外側で見張りをしているので、ここには居らず、今部屋の中にはカミヤとマルベリテの二人だけだ。

で、すっかり彼女に打ち解けたカミヤは、気になっていた事を呟くように聞いてみた。

「〈英雄〉ねぇ……。マルベリテさん、アバウトにお聞きしますが〈英雄〉とは何なんでしょう？　少なくとも肩書きだけじゃあないよね」

質問されたマルベリテは少しぎこちなくそれに答える。
どうやら向こうの方はまだ緊張しているらしい。

「ええと、〈英雄〉っていうのは、主にカミヤくんみたいな《神子召喚陣》から来た人たちの事を指す言葉……称号なの」
「へぇ、称号ねー……」
「うん。とりあえずなぜ英雄という言葉が、君達を指すようになったかというとね、凄ーく昔に遡るんだけど、この世界では一度大きい戦争があったの」
「戦争？当時の大国と大国が、とか？」

この世界の歴史について語り始めた所でカミヤは強く興味を示した。
そういう歴史の話を聞くのは嫌いじゃなかったからだ。まあ学ぶのは苦手だったが。

カミヤの言葉に彼女は首を横に振り、話を続ける。

「ううん。そんな生易しいものじゃなくて、この世界全ての種族、生き物という生き物がごちゃ混ぜになって血を流す、戦争と言えるかどうか分からない戦争、世界の混乱と言った方がいいのかな」
「……なんか聞くだけでも凄まじいな。それ」
「まあ私も見たこと無いし、聞いただけなんだけどね。けど、これは皆に言い伝えられてる本当にあった歴史なんだって。で、その戦争を《混界戦争(カオスオブウォー)》って言うんだけどね」
「《混界戦争(カオスオブウォー)》……」

彼女は話を続ける。

「その戦争は長ーい間続いてたんだけど、ある日それを終結させる人達が現れたの。その人達が今〈英雄〉と呼ばれている者達の起源、になるらしいんだ」
「……成程。〈英雄〉はその戦争を終結させた名誉のみたいな物か。で、なんでそれが俺とかが呼ばれるんだ？その人達の一時の名誉みたいな感じだけど」
「それはね、その終結した人達は様々な種族だったらしいんだけど、皆共通してた点があったんだ」
「共通点？」
「それはね、〈英雄〉はどれも場所は違うけれど神殿から出てきた事と、その種族の能力や実力を圧倒しすぎてたんだって。故に、何か別の言い方を当てはめなきゃ、けど下手な名は付けられない。ということで〈英雄〉がそれ以上に該当するのはないだろう、ってことらしいのです」

彼女はちょっと困ったように言葉を口にする。
あまり上手く該当する言葉が思い当たらなかったのだろう。だが、概ねだがカミヤには理解できた。

例えば見た目が全て同じ種類のハムスターが１０匹いたとしよう。
その１０匹のハムスターの内１匹だけ、他の個体とは見た目は同じでも、体の大きさが他のより１０倍以上でかく、走る速さも１０倍より速く、他の特徴も全て１０倍以上の個体がいたら、その個体を見た人は、果たしてそれを他の９匹と同じ種類のハムスターと言えるだろうか。
少なくとも、亜種か異常か突然変異。とでも付けてしまうだろう。
つまりはこの世界の〈英雄〉もそういうものの一種ということだ。

「あー納得。つまり識別名称な訳だ、〈英雄〉は」
「識別名称……うん、その通りな感じですね。で、召喚された〈英雄〉は戦争を終わらした力を持っている。圧倒的な力を持つということになり、英雄が所属している国は一部ですが権力的にも、軍事的にも政治的にも有利に立つことが出来るのです」
「……うわーい生々しい」
「まあそういうことは聞かれたら全てお答えしろと言われているので」

マルベリテは笑顔で言う。
カミヤには少し先程のエスシャナに被った笑顔に見えた。

「笑顔で言うな。あと聞かれたらなのか」
「えへへー、まあ聞かれなくても言わなきゃいけないことは言いますよー」
「……」

呆きれ顔のカミヤをよそにマルベリテは「何か質問ありますかー」と、明るい笑顔をしながらカミヤに聞く。
と、その時。部屋に場違いなヴーンという振動音が流れる。
「あ、ちょっといいかな」
マルベリテのきょとんとした反応をしり目に、カミヤは自身のズボンのポケットの中に手を入れてある物を取り出した。
「あ、それさっきの……」
「うん。ケータイ」
カミヤが取り出したのは神様の所に呼ばれる前から持ち続けているブラックカラーのタッチ画面式携帯電話。
この携帯電話、先程マルベリテに神器と言われたが、その神器の説明を受けて思ったことは、へぇ。と言った感じだけだ。
まあ確かにその通りと言えばその通りなのだから、特に意見をしない方が良いだろうという判断だ。
カミヤはそれを片手で持ち、持った手の親指を使い操作し始める。
「さっきもその神器を操作してましたが何をしているのですか？」
「あ、ちょっとね」
「……むー、確か通信に特化した神器だという事でしたよね？」
「うん、そだね。あ、そうだ、マルベリテさんちょっといい？」
カミヤは操作を終えたのか携帯電話を持った右手をマルベリテの方に向けた。
マルベリテは首を少し傾げる。

「？　何を？」
「この上にどっちでもいいから手をかざして下さいな」
「……はぁ」

マルベリテはとりあえず右手を携帯電話の画面の上にかざす。

「このまま出来たら少なくていいから魔力を流してー」
「ん」

そのまま微量の魔力を画面の上に流してみるが特に変な様子は無く、すぐにカミヤは神器をマルベリテの手の下から自分の手元に戻した。

「はいありがとー」
「……何だったんですかー？　今の」

マルベリテは怪訝な表情をするがカミヤはふふふと笑い、

「秘密だ」

片目を閉じた。
所謂ウインク。
しかしそのウインクの出来も似合い具合いも微妙だった。思わずマルベリテは口に出してしまう。

「うわ、微妙です」
「うわすいませんもうしませんごめんなさい」

カミヤも恥ずかしいことをしたと感じたようですぐに頭を下げ、

その様子にマルベリテはふふ、と笑いをこぼし、カミヤに追い討ちをかけた。

「まあ気にしないでいいんじゃないですかカミヤくん。ウインク、微妙だったけど」

「ありがとうございますマルベリテさん。もう許して下さい」

彼女、中々いじめっ子のタイプだ。カミヤはそう心の内で断言した。

カミヤがそう思っていると、急にマルベリテは不満顔をして、「むー」と唸り始めるではないか。

カミヤは心の声でも読まれたかと冷や汗物だったが、そんなことは出来ないだろう、だけどここはファンタジー、夢も魔法もあったんだった。いや魔術か。兎に角もしかしたら危険かもしれない。

が、彼女はカミヤの方を見ずに天井の方を向いていたので、どうやら違ったようだった。

安心した。のだけれど、

「マルベリテさんマルベリテさんマルベリテさんさんさんさん……。んー」

急に自分の名前を連呼し始めた彼女に違う意味でカミヤは不安になった。

というよりびびった。の方が正しい。

カミヤはとりあえず声をかけてみることにする。

「マ、マルベリ」
「禁止ー！！」
「へ？」

が、すぐにマルベリテ本人にぺちと頭を叩かれて、発言を押さえられてしまう。そしてそのまま口を開いてぽかんとしているカミヤを置いて話を続けた。

「私の事はマルベリテさんではなくニックネームをつけて呼ぶのだ！」
「あ、そーゆう」
「うむ、さあ呼ぶがよい〈英雄〉よ！」

何かノリノリだ。

うーんとカミヤは顎に手をやり、すぐに口を開く。

「じゃあルリで」
「駄目だ！　マルーと呼ぶがいい！　というより呼べ！」

無茶苦茶だった。
これが彼女の本来のキャラかもしれない。

まあ彼女がそう呼べと言っているのだ、そう呼んだ方がいいだろう。とカミヤは思った。

「マルーですね？　わかりましたマルベリテさん」
「むがー！」

先程の意趣返しのつもりでからかってみたが、彼女の怒りの声と

ともにカミヤは何か危険を肌で感じた。
しまった、何か間違えた？
「ごめんなさいごめんなさいマルーさんまじすいません」
「……さんは付けるんだ。まあいいか」
マルベリテは少し呆れた顔をしたが、表情をすぐに元に戻す。
感情のままに表情を変える彼女の姿は、見てる分には申し分無く面白く、ついにやけてしまう。
「やだなにその笑み恐いよカミヤくん！」
めっちゃ怖がられた。
というより距離を1メートル程離れられた。
笑ってただけなのに。
「あ」
落ち込んでるカミヤに気にせず、マルベリテは何か忘れてたような声をあげた。
「カミヤくんカミヤくん！」
「なんでしょうマルーさん」
「これから君のことをカーくんと呼んでいいかい？」
「何だ、それくらい別にいいですよ。気にしないで下さいよ」
「良かったー。まあ断られても呼んでたけどね！」
「呼ぶのかよー」
「これだけは譲れないねッ！」
そう言って彼女は歯を見せて笑う。

ころころ変わる表情は本当に見ていて飽きないな、とカミヤは思った。
その時、再び携帯電話が震え、カミヤが操作しようとしたところで――――。
「マルベリテ様ッ！　城内に侵入者です！」
扉が見張りの方の従者によって開けられ、侵入者の報告を受ける。
するとマルベリテは、すっと立ち上がって従者の方へ向き口を開く。その声は先程までの明るい声とは違い、冷たくて、少し低い。
「わかった、今すぐ迎撃の準備をします。テザは――すぐに来るでしょう、ドゥシーとここに待機を」
そしてこちらを振り返り、カミヤに向けてにこと笑う。
「カーくんはこの部屋から動かないどいてください。あ、安心してね？　一応エナちゃんの部屋と同じくらい丈夫な筈だから」
「わ、わかった」
「さあ、一つ侵入者退治と行きましょー」
一人掛け声を上げながらマルベリテは右手を前方に伸ばす。その手首には紅い宝石を填めたブレスレットが見える。そして腕を伸ばしたまま彼女は呪文を唱え始め、それに合わせるようにブレスレットに付いている宝石が発光し始める。
その様子を見ておお、と驚くカミヤをよそに、マルベリテは言葉を紡ぎ続ける。十秒程時間が経ち呪文が終わりに近付いたのか、宝石の輝きは一番強くなり、その魔術を発動させた。
「《付加魔術：身体強化・フィジカルアップ》」

身体強化の魔術の光が彼女の全身を覆い、すぐに蒸散する。
マルベリテの見た目には直接の変化は見られない。
だが、きっと身体能力はかなり上がっているのだろう。カミヤにはそう予想がついた。
彼女は肩に手をやりぐるぐると肩を回し、従者が待機する部屋の出口に向かい、気合を入れる。

「とりあえずエナちゃんの迎えに行ってきます、エナちゃん待ってろよ！」

さて、現在の侵入者（？）退治の隊列編成。
一番手、マルベリテちゃん。
二番手、従者のテザくん。
三番手、同じく従者のドゥシーさん。（予定）
最後尾、一応〈英雄〉カミヤ自身。しかも女の子の部屋に引き籠もり。

なんとも情けない〈英雄〉だった。
青年が同い年かそれ以下の女の子の部屋で籠城作戦。
まるで変態のようだ。
カミヤは自分でそう思った。

「さあ行く――」

そうしてマルベリテが扉を開けた瞬間――――

「えっ？」

「っ――――！　がっ」

――――マルベリテの体が反応する前に彼女の腕と扉の間を何かが通りすぎて、カミヤの声が部屋の中から響く。

「ッカミヤくん！？」

マルベリテは開けた扉をそのままに、急いでカミヤの様子を見に行く。

そこには倒れて腹を押さえてうめき声を上げるカミヤと――

「ナゥー」

その横にいる、巨大な饅頭が可愛い声を出して鳴いている姿だった。

「って、なにこれ？！　饅頭っ？！」

「……私にはわかりません」

部屋にマルベリテと従者のテザの呆れた声が部屋に流れる。

「ナー」

そんな事を気にしてなさそうな饅頭は、楽しそうに、嬉しそうに、部屋の中で鳴いていたのだった。

02 ―（後書き）

あい終わりました僕の箱庭戦争第三話。
いまだ序章から抜け出せません。

やっぱりよせにはこういう会議とか策略とか雑談とか世界構成とかもういろいろ難しいので変なとこ数え切れないくらいあるかと思われます。うはー。
特に会議の描写はなんかガクガクで……、うーんどうやったら上手く流れるように読ませられるでしょうかねぇ。
課題ですね。

まあそんなこんなでこの三話、回りくどい説明回でした。
地の分に説明文をあんまり入れないことがこんなに大変だなんて……。

ツェンドルフがすごい話の腰を折ってくれましたとさ。ちくしょう、この子すごい扱いにくい。

０３ー（前書き）

この回シーン変更が極端に多いです。
混乱しないようにしたかったのですが無理でした。感想で質問があれば答えます、序章があと１，２話で終わる予定です。その後はちーとだちーとだ。序章終了までがんばります。

03―

先刻、巫女の従者であるドゥシー・マクレインが、エスシャナを巫女の命で呼びだして、それにリモスバッハも付いていくという形となり、会議室にはツェンドルフとヤード老、報告に来た兵士を合わせた三人だけとなった。

そして、会議室にエスシャナとリモスバッハがいなくなって十五分程経った頃、ちょうどツェンドルフとヤード老の会話が弾んでいた時に、

「失礼致します。ツェンドルフ様、ヤード様」

再び従者のドゥシーが会議室に姿を現した。。――のだが、その表情はどこかすぐれていなさそうで、少し顔色が悪く見えた。

「どうしました、巫女の従者。エスシャナ様に何かあったのですか？」

「いえ、そういうことではなく……」

まさか、という思いで聞いてみたが、従者は首を振り、否定の意を示す。

ツェンドルフは首を傾げた、では一体なんだろう。

考え始めた所で再びドゥシーが口を開く。

その口をまごつかせている動作は、上手く自分の表現が出来るように言葉を選んでいるようで――――。

「信じられないとは思われますが、本当の事ですので、どうか一笑に伏せないで欲しいのですが――」

「いいから早く言ってみなさい。それは私達が判断することです」

「ふぉ、その通りじゃ。言わなきゃ始まらんぞ」
「わかりました」
二人に催促された彼女が選んだ言葉は簡潔だった。
「此処、フルケレナ城の見回りの兵士、及び全官務と全使用人、多分ですがこの城のここ――第一会議室と我主であるマルベリテ様にいる姫様や、大神官様達以外の者全員が見当たりません」
「はぁ？」
彼女の言葉の意味を理解するのにツェンドルフは少し時間がかかった。
しかし、言葉の意味が理解できても、内容が理解できない。
「城の者が全員消えた？　何を言っているのですか。冗談も程々に――」
しなさい、と彼の口から出ることはなかった。
なぜなら、それは彼女の目。
取引を主な仕事とするツェンドルフは、あの目を知っている。
あれは、真実を物語っている目。
ならば彼女の言っている事は――。
本当です。という従者の言葉と、誰かの唾を飲む音が、ツェンドルフの耳に届く。
二人は席から立ち上がる。

結果的に言えば、城にいた人達は全員見付かった。

「……馬鹿な……」

ギィン。

ツェンドルフの前にいる兵士の持っていた槍の、先端に付いた金属が硬い音をたてて落ちた。

「……これは」

ツェンドルフは愕然した声をあげ、彼の右隣にいるヤード老は、自らのふさふさした白い髭に手を当て、考え事をしているのか黙っていたが、その皺枯れた細い手は少し震えていた。

従者はすぐにここを離れていった。己の主とエスシャナ姫様に伝えに行くために。

彼等が今いるのは城から離れた場所にある第五訓練場。

従者の彼女の報告を受けた後、ツェンドルフとヤード老率いる一行は、念のため彼女の一度行った場所も確認したのだった。

執務室、第二・第三会議室、応接間、食堂、調理室、第一訓練場、使用人部屋、倉庫、第二訓練場、城門前、全廊下、兵舎、ｅｔｃｅｔｃ……。

様々な場所を回ったのだが全て空振りに終わってしまい、結局余り兵士すら来ない此処に至ったのだが、どうやら正解だったようだ。

ここ以外の訓練場は、普段兵士達が此処で鍛練の姿を見れるのだが、今はその光景は跡形もない。

「一体誰の仕業か……わかりますか？ヤード老」

「……こんなこと可能なのは〈英雄〉くらいしかわしは思い当たらんわい……」

ツェンドルフは今だ現実を受け止めることが出来ない。

ヤード老も現状を信じられないのだろう、どこか放心した声をしている。

彼等の目の前にある光景は確かに兵士達他全員がいた。

だが、彼等達は誰一人例外なく横にされ、奇麗に等間隔に並べられていたのだ。

全員が一定の距離を保ち、横になって明かりのついていない訓練場の広場や床、果ては廊下まで並んでいるという光景は誰がどう考えても、どう見ても異様としか言いようがない。

「ガエクッ！　お前等ッ！」

槍を落とした兵士が顔色を変えて、並べられている人の一ヶ所に飛込んでいく。

友人や知り合いがいたのだろう。その形相は必死だ。

彼が飛込んでいくのを見た後、ツェンドルフはそっと寝かされている一人に近付いて生死を確認し、息をしているのを見て、ほっと安堵の息を洩らした。

どうやら横にされている人は、全員眠らされているだけのようで、

剣や杖等の武器を持っていたが、見たところ怪我をしている人もいない。

「ふぅ」

ツェンドルフはもう一度息を洩らす。

但し先程の安堵の息ではなくて、こんなことが有り得るのかという、どこか諦めを含んだため息だったが。

彼等は目を覚まさない。

◇

その巨大饅頭は、両側面に垂れた象の耳のようなものを体から生やしており、ゆらゆらと動かしている細い尻尾の先端には、見る角度によって色が変わる綺麗な大きい水晶が付いていた。

「きゃー、柔かーい！」
「ナー」

只今マルベリテはその巨大饅頭の頬辺りをぷにぷにとつっついたり、ぐにーっと引っ張ったりして遊んでいる。
はたから見ていると、かなり痛そうに見えるが、本人（？）は余り気にしてなさそうで、むしろ喜んでるように見えた。

マゾなのかお前は。
先程の激突により負傷した腹を押さえながら、カミヤはそう思った。

貴様、裏切ったな。

「ナー」
「裏切ってないだと？　どの口が言ってるんだこいつめ」
「ナゥィー」

カミヤは巨大饅頭の頬をぐにゅーっと引っ張り、その掛けている力に合わせるようにそれは伸びていく。それでもどこか嬉しそうな鳴き声をあげる。

やらかい。
カミヤは凄くそう思った。

「カミヤはそのお饅頭さんの言っている言葉が理解できるのですか？」

そう聞いたのはマルベリテの横に座り、カミヤが伸ばしている逆

側のお饅頭の頬をぷにぷにとつっついてるエスシャナだ。
彼女は先程、マルベリテの要請を受けてここに来たのだったが、なぜか濃い髭の男――リモスバッハも着いてきていて、やはりこちらを睨んでいる。

だからなんで睨むのこの人。
カミヤは心からそう思っている。が、そんなの関係無しに、リモスバッハはカミヤを睨む。
初対面からどこか変な二人だった。

「うん、こいつの言っていることはわかるみたい」
「……それは私達と聞こえている声が違うのですか？」
「いんや、多分同じだと思うよ。ナーって聞こえているけど、違う？」

そう、カミヤはこの生き物の言っている事がわかるのである。
直接耳に入るのは鳴き声だけなのだが、頭の中では自然と言葉の意味が理解できる。
しかもどうやらそれはカミヤだけのようで、エスシャナはマルベリテにも聞いたのだが。答えは「わからないよー、やわらかいよー」の一言で済んだ。

「ナーナー」
「成程。いえ、同じですね。ナーちゃんでいいんでしょうか」
「ナー」
「あー、違うぞ。リオっていうらしいけど……まあナーちゃんでもいいらしい」
「リオちゃんですか……不思議な名前ですね……。まあナーちゃんでいいでしょう」
「ナー」

「やーわーらーかーいーぞー！」
「マルーさん、わかりましたから」
「あら」
「ん？」

と、カミヤがリオことナーちゃんにべったりくっついているマルベリテに声をかけた時に、エスシャナが少々驚いた声をあげる。

「いえ、なんでもないです」
「？　……そう」

しかしエスシャナは片手を振るだけで何も言わない。多少カミヤはいぶかしんだが特に気にしないようにして、現在マルベリテに枕にされているリオに近づく。

「よし、少し面白い事をしてあげよう」
「面白い事、ですか？」

彼女は頬に右手を当て、少し首を傾け不思議そうな表情をしてカミヤに尋ねる。その声は少し期待がこもっている、と思う。
とくと驚くがいい、特にマルベリテ。そう思いながらリオにキーワードを言う。

「多分ね。リオ、≪巨大化（マルナカルデ）≫」
「ナー」
「っわ！」「えっ！？」「む！」

マルベリテ、エスシャナ、妙齢のおじさん――リモスバッハと言

うらしい――が、其々驚いた声をあげる。
それもその筈だ。カミヤにキーワードを言われたリオはその饅頭のような骨格をそのままに、三十センチ程だった自身の体を二メートル程に巨大化したのだから。

「でっかくなった……」
「驚いた？」

マルベリテは呆然としながらそう呟いて、それに返事を返しながら、どこか自慢気にカミヤは三人を見回すが、三人とも先程声をあげた表情から変化がない。あれ、滑った？と思うカミヤにエスシャナから声がかかる。

「カミヤ……、今のは、あの、魔術なのですか？」
「え？」
「今の、この“巨大化”はあなたかナーちゃんの魔術なのですか……！？」

彼女は少し息を荒くしながらカミヤに近づく。隣にいるマルベリテや、扉の所にいるリモスバッハの方も見てみるが、皆同じように真剣な表情をして答えを待っている雰囲気を感じる。
ついでに彼女の従者も探す。あ、今は扉の外側だったっけ。

（というより、もしかして――）

しまった、という思いがカミヤを襲う。
先程、魔術と思われるものをマルベリテが使ったことから、こういう魔術も平気だろうと踏んでついリオの確認の為にもしてみたのだが、何かいけない事でもやってしまったのだろうかもしれない。
もしかすると、この巨大化が世間や誰にもに知られていない魔術

だとしたら。
だが、ここまで驚いた反応を取られるのはいささか不自然ではないのか。もうちょっと反応が薄くても大丈夫だろう。
（――まだよく分からないな）
ならば、一応ここで打つ手は――――。
「……あー、っとごめん。違うんだ。これは魔術じゃなくて、こいつが持っている固有能力なんだ」
「……それは他にも？」
「いや、分からない」
「……そうですか。では今のはどうして？」
「あ、これです。これ」
カミヤは自分の携帯電話をかざす。だが、画面の方は神谷の掌に向くようにして、直接彼女達は見ることができないようにして。
なぜかはよく分からないが、彼女達はこの携帯電話―この世界では“神器”と呼ばれている―物を、触ることが出来ないらしい。聞いてみた所、“神力”といわれている力がこれにも働いていてそれが関係しているとか何とか言われたのだが、カミヤにはよく分からなかった。
まあ、向こうもよく分かってないみたいだったが。
「成程、神器が教えてくれましたか」
エスシャナはそう納得した風にうんうんと首を上下に振る。
とりあえずこれでいいはずだ。一応は嘘は言っていない。カミヤは今一度気を引き締めた。

「それだけしか今のところは使えないのですか？」
「え、ええっと、でも魔術がいくつか使えるそうです。多分」
「ナー！」
「え、あ、ごめん。てかそれまじかリオ」

魔術が使える、と聞いた時、ぴくんとエスシャナの方が動き、リモスバッハの表情もさらに険しくなる。が、カミヤはリオに驚いた表情をして、すぐに苦い顔をしてリオと会話をしていたのでそれに気付くことはなかった。

「どうしたのですか？　カミヤ」

エスシャナは怪訝な声で聞くと、カミヤは苦笑いをしながら頭を下げた。

「ごめんなさい。なんかリオがその魔術の練習がてらに、ここに来る前に何かで遊んで来たんだって。んで、その時に城の中にいた人達にちょっと悪戯をしたそうで……」
「はぁ、遊んで来たんですか」
「ナー」
「楽しかったそうです」
「うわー。ね、ね、これ、ナーちゃんに乗ってもいい？」

と、先程から黙っていたマルベリテは、その目を輝かして呟くようにカミヤに聞いてきた。視線の先は巨大化しているリオことナーちゃんに向けられていて放そうとしていない。

「え、多分問題ないんじゃないかな、リオ？」
「ナー」

「だそうで」
「わからないよっ！　でも飛び込むっ！」

ぼよょん。
あ、弾んだ。

「うわー！　すっごー！　柔らかいし弾力ある！　何この生き物！」
「リオことナーちゃんです」
「……柔らかいですねぇ」

「失礼します」

こんこん。
部屋の入り口がノックされて、リモスバッハが扉を開ける。
そこにいたのはマルベリテのように首から下全身を覆ったロープのような服を着ており、体の起伏や白と青の帽子で少し見えづらい顔立ちから、若い女性ということがわかる。そのロープとマルベリテのものと違う部分は、胸と腰辺りにあるプレートの色が赤ではなくて青、そして縁を装飾していたのが金色ではなく銀色の金属と、両手首にはどちらにもブレスレットをしていないということころだろう。

それが彼女――マルベリテ・アルウィ・シテフシモンの従者の一人、ドゥシー・マクレインだ。
彼女は先程エスシャナ達にリオのことを報告をしに行ったままだったのだが、今戻って来たらしい。

「ドゥシーか、何だ？」
「はい。エスシャナ様、、マルベリテ様、リモスバッハ様、少々お話があるのですが」

「……それは今じゃないと駄目か？」
「はい、是非早急に。ツェンドルフ様とヤード様がお待ちです」
「そうか。失礼、カミヤ殿」

リモスバッハはカミヤの方を向いて、話しかける。その表情は先程の睨んでいた形相ではなく真面目な顔をしていたので、それにカミヤはちょっと驚いて声が上手く出てこなかった。

「は、はい何でしょうか」
「少しの間、姫様とマルベリテ様を席を外しますが、ご許しを」
「あ、いえ。全然大丈夫です。気にしないで下さい」
「ふむ、ありがとう。感謝する」
「はぁ」

なんで礼を言われるんだろう、と思うが特に気にしないようにしとく。

まあ、それにしても何があったのかを聞いてみたかったが、話の流れからして自分は藪蛇だろうということで口には出さないでおいた。

「それでは、少々失礼します」
「……うー、またねー、ナーちゃん」
「ナー」

カミヤに礼をして扉に向かうエスシャナと、名残惜しそうにリオのことを見ながらずりずりとエスシャナに引きずられていったマルベリテ、リモスバッハとドゥシーは先に部屋の外に出ている。

そうして二人が出て行くと、マルベリテの部屋の中にはカミヤとリオ、それとマルベリテの従者のテザだけとなった。

（――――どうしよう）

どうしようもなく気不味い雰囲気だった。

というよりどうしようもなかった。

□

「エナちゃん、これからカミヤくんのこと、どうするの……？」

そう声を出したのはマルベリテだ。

彼女は不安な顔をして、小ぶりな身体を更に縮こませて、おどおどしている。

先刻、カミヤと別れた後、彼女達は先程の会議室には行かずに、

兵士達に不人気で有名な第五訓練場に急ぎ足で向かっていた。
エスシャナは行き先に疑問を覚え、先頭を歩くドゥシーに聞いてみると「ツェンドルフ様やヤード様も其処に御座います」と返事があり、じゃあなぜ二人は其処にいるのかと聞けば「……説明するよりも実際に姫様達が直接お目になされた方がわかるかと」やそれに似たような答えしか返ってこない。しかし、彼女の主であるマルベリテや大神官のリモスバッハがしつこく聞いた――最後の方は脅しに近かったが――結果、渋々といった感じで彼女は口を開き、

「マルベリテ様、エスシャナ様やリモスバッハ様。今から話すことは実際目にした私にもいまだ信じられませんが、有りのままにお話しすると――」

結局、説明されながら向かったのだが、彼女が言った通りに聞くよりも見たほうが早いという事になって、それから更に急ぎ足で訓練場まで来たのだ。

そして第五訓練場の有様を見て、その事態の衝撃を受けたのである。

（成程、こういうことですか）

すでに寝かされていた状態から起きた者達の殆どが、持ち場に戻っていなくなっていたので訓練場の入り口付近は空いていたのだが、残った者は、まだ訓練場の奥で兵士や神官達により寝ている者達を起こしている作業の真っ最中だ。
彼等は寝ている者達の頬を叩いたり、声をかけたり、魔術を使ったりして目覚めさせていた。先程会議室に報告にしに来た槍を持った彼も仲間達と話している。

「エナちゃん……？」
「あ、ええ。まあ特には変わらないでしょう。今までの会議がちょっと無駄になっただけですし」

不安そうなマルベリテに慌ててそう返事をする。
そう、特に彼への対応に変化は無いだろう。エスシャナは寧ろ待遇がよくなるくらいだと考えていた。
なぜなら、起きた彼等に聞いた所によれば、どうやら彼等は白くてでかい饅頭のような物が現れたと思ったら此処にいた、という先にいたツェンドルフ達の報告にある。

白くてでかい饅頭、これを聞いて彼女達が思いついたものは一つ。
たった今カミヤと一緒に別れてきた、彼がリオと呼び自分達がナーちゃんと呼んだあの生き物しかいない。これはエスシャナの個人的な予想だが、この事態はあれがやったとみて間違いないだろうと思っている。
同時に、エスシャナは身を震わせる。先刻、マルベリテの部屋に居た時に、あの生き物から直接聞いた訳ではないが、それを通訳できるという彼は何と言っていた？

『――魔術の練習がてらに、ここに来る前に何かで遊んで来たんだって。んで、その時に城の中にいた人達にちょっと悪戯をしたそうで……』

遊び。
そう、遊びと言ったのだ。

元来、魔術というものは基本的には連続して行使できる。がそれ

は無論、連続して行使するのが下位の魔術や、下準備をすることや無詠唱で行使できる腕前があれば連続して行使することは可能だろう。

だが、少なくても訓練場などで固まっていた集団もあるのだろうが、城に居た全ての人数――把握はしてないが総勢八百は超える――を全員眠らせてから、場所を指定して転移させるという事。さらには、事態がまったく外に洩れていないことから、かなり速い時間で――つまり連続と言っていい程魔術を休まずに行使したはずだ。

尚且つ、それをした後も悠々と長らく研究されている巨大化の魔術、いや固有能力と言っていたか、を使えるという底なしの魔力。

エスシャナは考えれば考える程、あの生き物の恐ろしさを感じ始めてしまう。

この所業を一匹で引き起こし、城一つを占拠できる行為をしても、それを唯の“練習がてらの遊び”の“ちょっとした悪戯”。これのどこがちょっとした悪戯なのだろうか、あれが本気を出した時に何が起きるかは、エスシャナには想像も出来ない。

あまりにも実力が違う、もしかすると魔獣の中では災害と畏れられる最上位の実力に入るかもしれない。

そしてそれが彼に懐いているという事実。きっと彼の命令ならばリオは言うことを聞くのだろう。ならばカミヤは力の無い唯の一般人ではない。

「＞魔獣使い（ビースト・テイマー）＜……いえ、＞幻獣使い＜と言った方が正しいのでしょうね」

少なくともエスシャナハはあの生き物を見たことがない、それはマルベリテもリモスバッハも同じだ。

ツェンドルフも知らないと言っていたし、なによりあの知識人の

ヤード老すら本でも見た事がないし聞いた事もないと言ったのだ。もうそれは幻獣と言ってもなんら遜色は無い。

それならば、あれは珍獣ではなくて、それよりも珍しい幻獣。故に、それを従える彼は魔獣使いではなく、幻獣使い。

「流石は＞英雄＜……ですか」

エスシャナはそう一人ごちる。

やはり＞英雄＜に只者はいないのだとそう思って。

「エスシャナ様、マルベリテ様」

声をした方に顔をやると、そこにはツェンドルフとヤード老。どちらも真剣な表情をしている。

「エスシャナ様、これはやはり彼が？」

「直接ではありませんが、そうみて間違いないかと思います」

正確には、彼に懐いている生き物だが。

「では……兵士達が言っていたものは」

「そうですね、彼に従う幻獣の仕業です。先程呼び出されたのはあれが原因でした」

「幻獣とな？　ふむ。それはまた、それはまた」

エスシャナの言葉を聞いて、ヤード老はどこか楽しそうに呟いた。おそらくだが、彼の知識欲が疼いたのだろう。いつまでたっても元気な人である。

ツェンドルフは眉間に皺を寄せて難しい顔をしながらゆっくりと口を開く。

「エスシャナ様。これは、彼が意図的に指示したのでしょうか？」
「いえ、多分違うかと。彼がその気でしたら今頃この城は占拠されていましたでしょうし、もしも予行だとしても――彼は、“遊びがてらのちょっとした悪戯”と言っていたので」
「悪戯ッ！？　これがですか？！」
「……ふむ、測り知れないのぅ……」
「実際に見てみましたが、私にもあの饅頭の全貌が想像出来ませんな」
「わ、わたしもです……けど、神の判別なら別だと思います……」

神の判別、それがあったか。と言った風にヤードを除いた全員がそんな風に呟いた。そして今度はヤードも含めた全員の視線が唯一それが出来る巫女であるマルベリテの方へ向かい、それに答えるようにマルベリテはうんうんと上下に頷いた。

「ですね。それは巫女の貴女に頼みましょうか」
「ふぉ。頼むぞ巫女様や」
「はっ、はい！　頑張らせて頂ますっ！」

その後、エスシャナとマルベリテはドゥシーを連れて第五訓練場からカミヤの待つマルベリテの部屋に戻っていった。そして彼女達が去った後、リモスバッハ、ツェンドルフ、ヤードの三人はそのまま各自の部屋には戻らないで、とある部屋へと向かっていた。

「……さて、ヤード老様、ツェンドルフ」

彼らを引き連れて先頭を歩いているのはリモスバッハだ。彼は残った二人に姫様には秘密に話があるということで、ヤードとツェンドルフに話しかけたのだった。

「わかっているリモスバッハ。君が話したいことは彼、＞英雄＜のことだろう」

「ああ、その通りだ。姫様は彼の事をああは言っていたが、な」

秘密裏の話とは三度彼、カミヤの事について。

そう、姫様や巫女の前では一応は賛成はしたが、実際彼等の内心は不安で一杯だった。なにせ城一つをある意味で占拠するというパフォーマンスを被害者側で見せ付けられたのだ、当然と言えば当然だろう。

彼女は彼の事を＞幻獣使い＜と言って褒めていたが、あれならばまだ何も出来ない張りぼての＞英雄＜の方が数倍ましだった。

彼は既に自分達にも被害を受けるかもしれないというリスクを持った爆弾だ。

「ふぉふぉ。ならばどうするかのぅ」

「やはりここは条件を少しでも縛るべきでは？　彼を見た人の感想からならばどういう人間か少しぐらいわかるはずですし」

「……まあ、気の弱そうな人だったな、彼は。おどおどしていたし」

「で、本命はなんじゃリモスバッハ？」

「……国宝を使わせてもらいます」

「……？　何かここの宝物庫にありましたかね……って、まさか」

国宝級の魔道具で、尚且つ今の状況に似合う物。それはツェンドルフには一つ思い当たった物がある。だが、それは――。

「……≪コルハンガリの首飾り≫じゃな」
「うむ、その通りですヤード老様」
「なっ！　リモスバッハ貴方、＞英雄＜相手に正気ですか？！」
ツェンドルフは嫌な予想が当たり、思わず声を荒げてしまう。
≪コルハンガリの首飾り≫。
この世界に十も満たないであろうという“名ばかり”の装飾品。
＞英雄＜の一人が作り出されたといわれ、この国にも国同士の友好協定の裏側で贈られたという代物でもある。
「もちろん、私は正気だ」
「っ……」
リモスバッハからは何かに取り付かれているような、衝撃で視界を見失っているような目をしていない。あくまで真直ぐで、正気の目をしている。
「しかし、＞英雄＜はそういう類は効かないのでは？」
「そうかもしれないが、同じ＞英雄＜が作った物だ。それに、彼に懐いている幻獣は規格外だが、彼自身はどうだ？」
「……あぁ」
「成程のぅ。それは、確かに……」
「でしょう？　上手くいく可能性のほうが高い」
そして、リモスバッハを先頭にした三人はある部屋の前で止まる。
ある部屋とはもちろん宝物庫だ。そこの門番に軽い挨拶をして部屋の奥に進み、更に錠が掛けられている扉を開けて中に入る。
その入った部屋の奥、鍵が掛けられた硝子製の箱の中に、柔らか

そうな布の上に置かれている綺麗な首飾り。
これが≪コルハンガリの首飾り≫。
大小色取り取りの様々な宝石が金の上に惜しむことなく散りばめられており、光を当てれば宝石がその光を変色させて床を照らす。首飾りの着脱部分はホックなどではなく、その前面に似合わない太い鎖でできていた。
それは誰が見ても高級で素晴らしい首飾りだと思うだろう。ならば、なぜそれを知る者にとっては“名ばかり”なのか、その理由はこの首飾りの本来の役割は、付けた者を飾る装飾品ではないからだ。

≪隷属の首輪≫。

それがこの≪コルハンガリの首飾り≫の裏での正式名称。
この首飾りは、その裏の名の通り付けた者を、それに登録されている首飾りの持ち主の言うことを何でも聞く、言わば最高級の洗脳魔道具。

使い方は簡単で奴隷にしたい人の首に巻くだけ。持ち主の登録方法は本人の魔力で真中に填められている赤い宝石に名前を書くだけだ。この持ち主登録は上書き可能で、書き込める名前の要領は一人だけである。但し、この首飾りは一度つけてしまうと装着者か主側かが死ぬまで外せないし、名前の書き換えは不可能となる。

と言う風な説明が、その硝子製の箱の下のプレートに書かれていた。
そして今、硝子箱が外されて、首飾りが何十年ぶりか外部の空気に触れる。
リモスバッハは首飾りを布の下から慎重に両手で掬うように取り出し、再びこの部屋の出口の方へ振り向いた。

「問題は、これをどうやって幻獣を掻い潜って彼につけるかだ。何かあるか？」
「……まあ、無難なところは就寝時に夜伽に向かわせた者に持たせて隙を見てそれをつける。とかでしょうか」
「騙してもいいんじゃないかのぅ」
「ふむ、確かにどちらもいいですな。騙すのなら……＞英雄＜の証としても問題はなさそうですかな？」
「ふぉ、そこらへんが妥当じゃな」

「――しかし、ヤード様は意外と乗り気なんですね」
「む？　……まあ、そうじゃのう」
「私は結構反対するかと思いましたが」
「……まあ、わしも流石に気が引ける。余りこういうことは好きではないんじゃがな。あれを見せ付けられた後じゃとな……」
「……しかし」
「それに、リモスバッハ。お主、誰をその首飾りの持ち主にするつもりじゃ？」

確かに、この≪コルハンガリの首飾り≫は持ち主に隷属させるための道具、下手な人には預けられない。それが、例え友だとしても。

だがリモスバッハは何事も無いように、即答した。

「姫様か巫女殿です。できれば姫様の方が望ましい」
「と、言う訳じゃ。姫様ならば力に溺れたりせずに、また、彼を奴

隷のように私利私欲に扱うことは無いはずじゃろうし」

憶測じゃがな、とヤードは続けた。

成程、リモスバッハはあくまで国ではなく、エスシャナを基本としている考えだが、それを信じるならば裏切って自分を持ち主にすることは無い。それに、彼女と巫女を小さい頃から見てきた親のような心境なのだろう、それに長年付き添った友でもあるのだ。

信用しなければ始まらない。

ならば、私も――――。

「成程、わかりました。ならば私も覚悟を決めようではありませんか」

この世界にやって来た、一人の少年の＞英雄＜を策略の手に掛ける覚悟を。

「とりあえず、どうやってそういう事が嫌いなエスシャナ姫様に、それの持ち主にするかを考えましょうか」

策略は、進む。

◇

「ねぇ、エナちゃんエナちゃん」
「何ですかマルー？」
「エナちゃんは結局カミヤくんと結婚するの？」
「ああ、お世話の事ね。……うーん、まあ、そうですねぇ……彼がすると言ったらするんじゃないでしょうか？　もしかしたら強制かもしれませんが、まあ覚悟はしてましたし」

お世話と結局の所、エスシャナ自身と＞英雄＜の結婚の事で、彼を此処に所属させるための手段だ。
素性とかを知るために、あえて誤魔化してきていたのだが、彼はどうやら本当の＞英雄＜と分かったので、エスシャナが結婚する可能性が濃厚になってきている。

「本当に？」
「ええ」
「でも――――」

マルベリテは不安そうに聞く。

確かに、エスシャナにも思う所はある。もしかしたら彼は結婚するしないに関わらず、この国に留まっていてくれるかもしれない。
されど。

「……分かりませんね。ふふっ、自分の気持ちなのに……」
「……そっか」
「そうです」

今は、こう答えるしかない。

「あ、着いたね。私の部屋だ！」
「そうですね。さ、カミヤが首を長くして待っているので早く入りましょうか」
「うんっ！　ナーちゃんっ！　カミヤくんっ！　テザッ！　特にナーちゃんっ！　今戻ったよー！」

バンッ！
と、大声を出しながら、マルベリテは体を前のめりにさせて勢いよく扉を両手で押し開けて、

「のわっ！」

何かに躓いて、頭からこけた。

「あいたたたい、一体何が――って、あれ？」
「……テザ？」
「ぐー」

マルベリテの足に引っ掛かったのは彼女の従者のテザ。だが、カミヤの見張りをしていたその彼は、今は横になって、聞こえてくる

寝息から寝ていると言うことが分かる。

従者に選ばれる程の実力がある彼が、見張りの任務の途中で寝るはずも無く、ならばこの部屋に居る筈のもう一人と一匹は――――

「……いない」

一人の＞英雄＜は、シェロウ国に来た一人の＞英雄＜は、この国から、既に姿を消していた。

03 ―（後書き）

さて、ここでシェロウ国はしばらくサイドアウトします。
しばらくしたらまた出番があると思うので彼女達に感情移入しちゃった人は残念ですが、出番をお待ちください。
なんか書き終わったの読んでみますと、キャラに感情移入させない感じになってたので（文章力が無いとも言う）個人的には丁度いいやと思ったり思わなかったり。
ただ次章からは感情移入できる文章かけるといいなと思ってます。
キャラ濃いのを次章だしまくります。多分。

04―

シェロウ国の巫女であるマルベリテ・アルウィ・シテフシモンの二名の従者の内の一人、テザ・ラーバンシルは今現在大変困っていた。

（どうすればいいんだこの状況を……）

彼の目の前には、国が両手をあげて歓迎する存在である〈英雄〉の一人がいる。あとその使い魔らしき生き物がいるが実質ここにいる人数は二人だ。

先程までここにいたエスシャナ姫とマルベリテは自分と同じ職についているもう一人の女性に連れていかれてしまい、自分はここで彼の見張り役をしている。

これが王や姫の謁見の際に通路の脇で横から見ているならまだしも、今の状況は己が主である少女の部屋で二人っきり。はっきり言って、嬉しいとか感動したとかいう気持ちは全くせず、寧ろどうすれば我関せずで貫き通せるだろうか、と言う思いで一杯だった。

願うことなら話しかけて来ないで欲しい――。

が、彼の思い虚しく、その願いは叶うことはなかった。

「あの、テザ……くん、でしたよね……？」

「あっ、えっ？　はっはいなんでしょう〈英雄〉様っ」

〈英雄〉に声を掛けられた。

なんで俺がこんな役目を……。と自分の役目を呪いつつ、でもこ

の役目は彼女からの頼みでもあるわけで。

「いや、そんなに動揺しなくてもさ……、まあいいや、テザくんであってるんだよね」

「は、はいっ、シェロウ国家主要都市フルケレナ所属の巫女護衛兼従者特別選抜隊隊長の一人テザ・ラーバンシルですっ！　〈英雄〉様以後おみしりおきききをっ！」

「テザくん落ち着いてっ！」

落ち着いて。

そうだ、先ずは落ち着かなくては。その言葉でテザは口を閉じて、鼻で息を深く吸う。そして一度呼吸を止めて、ふーっと今度は口から吸った空気をゆっくりとはきだした。

この動作をするのにかかった時間は五秒程。その間〈英雄〉様は心配そうな目で見つめていたが、自分には特に何も言わなかった。

（特に気にしないのかな？）

そう思いながらも落ち着くまで待っててくれた事に感謝しつつ、今度は噛まないように気を付けて口を開く。

「大変失礼しました〈英雄〉様。改めまして私はマルベリテ様の従者、テザ・ラーバンシルです。変わらず、テザとお呼びください」

「あ、カミヤです。あとテザくん」

「は、はいなんでしょうか〈英雄〉様」

「うんとね、その〈英雄〉っていうのを止めて普通にカミヤと呼んで欲しいんだけど……」

「はい、承知しました。ではカミヤ様、と」

「……様かぁ、でもテザくん、見た目から判断するに俺より一、二歳下なだけでしょ？　そんな気にしなくていいのに。ね、何歳何歳

？」

気軽だ。〈英雄〉様、いやカミヤ様はなんというか、気安いのではなくて話しやすい雰囲気と言えばいいのだろうか、テザはそんな感想をカミヤ様の態度から思う。

（年齢か……）

改めてテザは彼のことをよく観察する。黒い短髪に黒い瞳、肌は自分と同じような肌色をしていて、着ている服や彼の雰囲気はどこか＞ヒノク二＜を思い出させる。

若い顔立ちからするに十七、八位だろうか。少なくとも二十は越えていない気がした。

「あ……と、十四ですが……」

「え」

自分の年齢を口にするとカミヤは固まり、その後ちょっと落ち込んでいるようで、小さく「流石外国……」と呟いている。

何かそんなにショックだったのかな。

「カミヤ様の御年齢は？」

「“御”とか付けなくていいのに……。十八ですよ十八ー」

「あ、やっぱりその辺りでしたか」

「嘘、俺ほんとは五百歳」

「えっ！」

「本当に信じないでっ！」

◇

「なあテザくんテザくん」

一通り冗談など話した彼等は部屋の床に敷いてある絨毯に座り、巨大化したままのリオをもにゅもにゅするまでの仲になっていた。

リオはたまに気持ちよさそうに鳴き、柔らかい感触の体がふるふるとたまに揺れる。

「なんですか？　カミヤ様」

「俺以外の〈英雄〉って見たことある？」

カミヤ自身以外の〈英雄〉、その存在はこの世界には彼以外の英雄は複数いる。

だが、その人達は皆国の中心もしくは主柱の一角を担っているらしいので一般人が対面する機会は余りないだろう。だが、今会話しているテザの主であるマルベリテはこの国の巫女。当然社交会等に

出席は出来るはず。ここの持ち場からほぼ離れることが出来ないという巫女でも、やはりこの国の社交会や招待されれば話は別だ。

「うーん、まあ数人ですが……」

カミヤはこの世界に来る前に別の世界に住んでいた。そこの世界では知り合いがいるというのは、考えなくても当たり前の事だろうが、しかしそれでも知り合いも召喚されている。という可能性は低いだろう。

先程カミヤがマルベリテから聞いた所によれば、住んでいた地球の事は〈英雄〉から聞いていて、それを文章に残している学者達は数多くいるが、書いてある事はみな鋼鉄の馬のことや、人を乗せて地下を走る巨大土竜等、まるで伝説のおとぎ話のような話ばかりだ。と言われて説明を求められたがそれはそれだろう。

結局、上手い説明は出来なかった。

このことから、この世界は地球――〈英雄〉のいた世界――は想像もついていない、ということが分かるのだけど、地球にいた頃の思い等は全て神様に抹消されているので特に懐かしいくらいにしか思わない。

閑話休題。

「それじゃあさ、どっか人が住みそうに無い場所ってどこかにある？」

そのカミヤの言葉を聞いたテザは一つの場所を思い出す。人混みを嫌い、政治が面倒。つまりは、俗世から離れた立ち位置で静かに暮らしたいと言うことだ。それならば、この世界の人が近付かないと知れ渡っていて、尚且つ〈英雄〉しか行けなそうな場所はテザの中では一つしかない。

もし、其処にその女性の《英雄》が召喚されていたとするならば、有り得なくもない話だ。

「<ラリュティア>が、その際たるものかと……」

「<ラリュティア>？」

「昔この世界に出現した、凶悪な魔物や大型魔獣、聖獣、はては竜などが中心に住む大陸です。そこならば、普通の人はまず近付けませんし、余程の実力がないと住む所か生きていく事は不可能です」

カミヤはぽん、とグーに固めた片手でもう片方の掌に軽い音を出すように叩いた。

「なる、そこならば確かに〈英雄〉の一人くらいいるかもしれないな……って出現？」

「そうですね。伝承に因れば、ですが」

「あ、そうじゃなくてね」

出現したとはどういう事なのだろうか。そんな風に聞かれたと言うのは初めてなんだろう、テザは「もしかして、知らないのですか？」と聞いてきたので、カミヤは即座に首を縦に振る。

「ちょっと教えてくれないかな」

テザはその整った顔を緩ませて承諾する。

「いいですよ。とりあえずこれはいくつかの年代が分かれますが、何時の時代からお話ししましょうか」

「アバウトでいいので、一番昔からで」

「承知しました。ではかいつまんで話しましょう。この世界には、本来三つの大陸しかなかったと言われています。一つ目がリュテミ

ス王国等がある亜人大陸＞アルスヘイムズ＜、通称〈人間界〉です。この大陸にシェロウ国は存在しています。二つ目が魔族等がいる魔族大陸＞メルタデュオ＜、通称〈魔界〉と呼ばれていますね。最後は神界＞アミリア＜これが大陸の呼称です」

そこは先程マルベリテから教えて貰った。余りにも一方的な説明すぎて、聞きたいことが聞くタイミングが来ないままでこの部屋から出て行ってしまったが。

そういえば何時帰ってくるのかなあの二人。

リモスバッハさん抜きで。

「初めはこの大陸だけだったのですが、その昔、約四百年前でしょうか。突如、新しい大陸が登場します。そこには新種の草花、動物に魔物そして先住民がいたそうです。その大陸は、気付いたらその場所に存在していて様々な歴史があるのですが、今は省略しますね」

「へー。じゃあ今はどうなってるの？その大陸って」

「一応大陸はあるのですが、二百年程前からリュテミス王国の傘下国になっていますね」

「あらら、占領されちゃったのか」

そうなのかー。とカミヤはぼやきながらもテザの説明を聞く。

「戦争をした結果だそうですよ。学説では新大陸側は最期まで反対してたそうですが。さ、話を戻しますが、そういったようにこの世界では極稀にですが、地図上の何もなかった場所に突如大陸や国が現れるのです。そしてどうやらその土地系だけは、この世界に元からあるとされているこのアルスヘイムズ大陸や接しない形で、ですが」

「この原因はいまだ判明しておりませんが、漁業関連に対しては問

題が起こらないのはいいことです。恐らく〈英雄〉の存在に何か関係してるのではないか、というのが推測されていますね」

そこまででとりあえずテザは一度区切り、んんと咳払いをした。

「土地系ってことは、他にも出現するものがあるってわけなんだ」

「その通りです。特に大陸で有名なのは今言った約四百年前の大陸の出現や魔郷大陸<ラリュティア>、様々な部族をその土地に住ませている現ルテノア傘下国<ドーラ>、百五十年前の〈天浮大陸〉の出現ですかね」

「へー」

「土地系というのは大陸や迷宮のことですが、それだけではなく、他にも『八本の祝福大樹（エイト・ユグドラシア）』などもありますし。――あっ、大陸でもう一つ言い忘れていました。一番最近、一年半前頃ですかね、その頃に発見された彩和国家<ヒノク二>も注目を――」

「ちょっと待って」

突然、テザの話の途中でカミヤが口を出した。

それは荒くはなかったがかなり大きい声で、部屋全体に響きわたる。

「え、と。どうしました……？」

テザは何か悪いことでも言ったのだろうか、と内心で振るえ上がる。しかしカミヤの表情を見てみると、その顔は怒っているのではなくて驚愕した表情で、まるで予期せぬ事態が起きたように顔色を悪くしていた。

そして、カミヤの背中の支えと化して寝ていた筈のリオはいつの間にか起きていて、視線を此方に向けていた。そしてその視線は、どこか威圧感を感じる。

「今、＜ヒノクニ＞って言ったよね」
「はい」

カミヤはテザに質問をする。というよりは確認か。だが、やはり今のカミヤは何かおかしい。
先程の気軽さと代わって感じるものは圧倒的な質量を持った威圧感と圧迫感。テザの全身には鳥肌が立ち、何もしょってない筈の肩が重く感じる。

「で、それがいつ発見されたんだっけ」
「い、一年半程前ですが……」

すると、カミヤは口に手を当ててしばし考える動作をし、そしてゆっくりと、静かに声を出した。

「テザくん、質問いいかな」
「は、はい」

一体＞ヒノクニ＜がどうしたというのだろうか、テザには全く分からなかった。が、先程から感じている圧迫感は無くならず、寧ろ増しているように感じる。

「＞ヴァルデリア＜と＞アリュテミス＜。これに聞き覚えはある？」
「……ありますけど」
「それは、何で」
「それは、さっき言った土地――いえ、出現した大陸の昔の呼称の事ですが……」

ぎゅうう。

カミヤは自分の手を固く握り締める。掴んでいる服には皺が寄っていた。

「……最後に、さっき説明してくれた約四百年前に出現した大陸の名前と出現したのが何年頃かわかる？」

「正確にですか？」

「うん」

「ええとですね、国に残された記録文書によれば新界大陸＞イスタルディオ＜、発見されたのが三百九十五年前だと――」

がばり。

突如、天井に向けてカミヤは仰ぐ。手に顔をやって「あー」とため息混じりの声をあげた。

その表情は、手によってテザには見えない。

そして十秒程そうして、顔にやった手を戻しながらテザの方を向いてカミヤは微笑みながら口を開いた。

「よし分かったありがとう。テザくんには感謝するよ」

「いえいえっ、そんなことはありません」

慌てた様子で前に突き出した掌を振るテザ。そんな彼にカミヤは先程とは別の、どこかすまなそうな、申し訳なさそうな微笑を浮かべて、言葉を続けた。

「それと、ごめんね」

「ナー」

「えっ？」

カミヤがそう言った瞬間に、テザの視界は暗くなった。そして徐

々に遠のいていく。テザは何が起こったか分からずに叫び声をあげそうになるが、それは出来なかった。
声が出ない。いや、声だけではなく体全体が重く思うように動かせない。本当に何をされたのか、状況を理解するための頭が回らない。そして頬に当たる絨毯の感触すらも失っていき――――

「行くぞ、リオ」
「ナー」

――――耳にそう聞こえたのを最後に、テザは意識を落とした。

◇

その日の夕暮れ時、三百九十五年前に出現したといわれる大陸＞イスタルディオ＜で、誰も知らない一つの事件が起きる。
アルスヘイムズ大陸の中でも大国であるリュテミス王国、その一

部である大陸＞イスタルディオ＜内の都市の一つ＞シンリラ＜にある教会の一室――三角木馬や手枷に鞭が置かれている――で、そこの神官長に剣を突きつけている光景があった。人が人を襲うというのはこれだけでも十分事件なのだが、何よりも重大なのはその剣を突きつけている十七、八の少年、彼の後ろにいる少女にあった。

少女が着ているぼろぼろのコートの下に見えている綺麗な白肌には、いくつかの――鞭で打たれたのであろう――蚯蚓腫れが出来ていて、その少し痩せている顔には殴られたのか少し赤く腫れている。だが今注目すべきところはそこではなかった。万人が見たら驚くことは少女が鞭を打たれていたということではなく、また少年が剣を突きつけていることでもない。それはその少女の頭部、こめかみには綺麗な瑠璃色をした小さな二本の捻れた角が生えているということだ。

緋瑠璃族。

リュテミス王国では異端と忌避されている緋瑠璃族。つまり今この少年は、その一族の少女を庇ったという事だ。異端認定されている者を庇う、これは大国の権力と法律と宗教に喧嘩を売ったような行為。

神官長と対峙しているその少年は怒りの形相しており、手に持った剣を神官長に突きつけて、言う。

「お前等、俺の庭を荒らした覚悟は出来てるんだろうな」

「何の事だッ！？　お前っ！　異端と見なされたいのか？！」

異端認定。

それはこの国では人権を認められないで、奴隷のような身分を持つことを意味する。この国では異端認定される事はすなわち国外追放か死を意味するということだ。しかも、国外追放をされた後でも

他国の扱いは酷いものとなる。この国に住む者は普通ならば絶対されたくないことの一つだ。
だがその少年はそんなことは聞こえていないのか気にせずに笑う。
「何の事？　そうか、そうなのか。ははは っ、そりゃそうか。占拠して百年以上経ってりゃそうなるかもしれないな」
「――っ貴様！　無視をするか！　いいだろう、今ここで貴様をリュテミス王国の名において――」
「黙れよ」
「――っ」

少年は喚く神官の喉元に剣を更に近づけて、静かにするように促した。剣の先端は僅かに刺さり、血が滲み始めている。
そして少年は神官の彼が見た事のない――掌に収まるくらいの大きさをした黒い――道具をポケットから取り出す。それを親指で画面を操作して、何かを押す動作をした。

そして、宣言する。

「俺の創った世界をぶち壊したことを、後悔させてやるよ」

そして剣を持った手を動かして、その手を放した。

◆

その日、世界に新しい大陸が出現する。
その大陸は＞アルスヘイムズ＜と＞メルタデュオ＜の境界線の北に位置するように現れ、その大陸は人間界の戦争と魔界の新たな火種になると大陸に住む者は誰もが皆そう思った。
大陸が現れたと同時刻、様々な部族達の年配者や子供達が急に泣き始めたという。その理由は分かっておらず、皆言うことは同じで、何かが来たということだけだ。
だが、彼等には一つ共通点があることに気が付かなかった。その部族は全て“出現した”大陸の先住民だという事に。

そして大陸の出現はそれだけでは終わらず、今まで存在しないと言われ続けてきた一つの事象を覆すことになると言うことを、この世界の者達はまだ知らない。

その大陸の名前は＞アルカディア＜。

その名の意味を、この世界に居る殆どの者は知らない。

三百九十五年鳴らなかった序章の終わるベルが鳴り、世界は転換を迎える。

０４ー（後書き）

序章終了です。
ここまでお読みくださり感謝ですー。

さて、ここで後２．３話でちーと開放です。
ほんとに前振りが長すぎてすみません……。

０５ー（注意！　前の０５話と、殆ど内容が変わっています）（前書き）

なにか煮え切らないのでこの話を八割ほど改造しました。しかし結局不完全燃焼……。まあ、前よかすっきりした感はあるのですが。前のほうがよかったかどうか言ってくれたら嬉しいです。

前から読んでる人はもうしわけないのですが、いろいろ違っている部分がありますので、もう一度読んで欲しいです。

次話は早め書き上げます。既に２０ｋｂほどは書いたのですが、区切るにはまだちょっとなのでー。

０５ー（注意！　前の０５話と、殆ど内容が変わっています）

＞イスタルディオ＜。
アルスヘイムズ大陸を代表とする場所、所謂人間界側に属しており、今はリュテミス王国の傘下国である土地である。
大きさは中堅国家が二つ三つ入る程度だ。
両大陸の距離は近く、今では大陸同士を繋いでいる大橋が存在していて、＞イスタルディオ＜大陸内の都市はアルスヘイムズ大陸に近ければ近い側ほど人が多く住んでいて大きいくなっている。逆に遠い場所には都市は余り無く、村などの方が多い。

そんな都市の中の一つ＞シンリラ＜。
アルスヘイムズ大陸側に三番目に近い位置にあるその都市は、漁業を主流にした貿易をしている。

その都市の真中に作られている幅広い道――所謂中央通りには様々な格好をした人が見られ、とても賑わっている。
腰に剣や狩猟用のナイフをぶら下げている冒険者や、同じくその隣を歩く分厚く丈夫そう皮の胸当てを装備している者。それとすれ違ったのは大きな袋を両手に持って歩く大柄の女性――夕食の買い物をしてきたのだろう、その袋にはいくつか大根のような野菜や人参が入っていた。中央通りの真ん中を商人が荷馬車に乗って進み、その荷台には大きさが一メートル程で統一された木箱が積まれている。

そして、そんな中央通りの道脇に一人の少女がいた。
ボロボロのコートで身を覆い、頭にはコートについているフードを深く目元までかぶっている。手には木で出来た籠を持ち、その中にはパンや果物等が入っている。
少女は中央通りに歩く人達を避けながら進んで行き、都市の中央通りからわき道に入り、多少入り組んでいる通路を急ぎ足で歩む。
そして、ある一つの家の入り口の前で少女は立ち止まり、二、三深呼吸した後にその建物の扉を開けて、中に入って行った。

◆

中央通りから離れ、店と店の間にある道を通れば、枝分かれするようにいくつもの道路がある。その通路には中央通りとは違い、歩道と車道を分けてはおらず、また中央通りの半分の幅も無い。しかし同じように、石畳で舗装された路に並ぶ
ように、店や家屋が建てられている。人混みは中央通りのように混雑している訳ではなく、数人が歩いている程度だ。中には一ヶ所に

固まり井戸端会議をしているおばさん達もいる。

そんな通りの中の一つ。

この地域ではさして珍しくない、何処にでもある二階建ての家。その二階にある一室のベットに一人の女性がいた。

二十代前半だろうといった整った顔。まとめたりせずに、そのままに垂らしているくせ毛のないブレンドの髪。はおっている毛布に包まれた体に少しの起伏はみられるが、その体は全体的に痩せていて、頬にも少し窪みがある。

そんな彼女、クレア・カーマインは、もう数年は共にするベットの上で、上体を起こし、空の色しか変わらない景色を見続けていた。

きい。

部屋の入口であるドアが開き、クレアは外の景色から視線を外し、その音の方向に目を向ける。視界には開いたドアの向こうから一人の少女が入った。

その少女は淡い紺色のコートで百三十にも満たない体を覆い、それに付いてあるフードで頭を隠している。その下から見える目は綺麗な紅い色をして、胸まで伸びた赤い髪の毛は手入れをしていないのでボサボサだ。右手には木で出来た安物の籠を持ち、その中にはパンや果物等が入っていた。

そんな無言で入って部屋に来た少女にクレアは微笑み挨拶をする。

少女は彼女にとって最愛の妹であり、家族なのだから。

「おかえり。ミユア」

その少女――ミユアはクレアに簡単な礼をしてコートを脱ぎ、今から料理を作ると伝えて一階にある台所へと向かい、再びクレアの周りには静かな雰囲気となった。
しかしその静かさは先程までとは違い、開けた窓から聞こえていた雑談はしなくなり、微かに届く、中央通りの賑やかな音しかしなくなる。右横にある窓から入る日差しは暖かくて、クレアにはこの空気はどこか心地良かった。

（――静か）

予想するに、今日はトマの株のスープだろうか、ミユアが作るそれは好物なので凄く楽しみだ。そんなことを考えたりしながらクレアは夕食を待つ。
申し訳無い、と心の奥で思いながら。

およそ一時間後、窓とは逆側のベットの横に置いてあるテーブルで、クレアはミユアと夕食を一緒に食べる時間だ。

クレアは掌を胸の前で合わせて、食物と夕食を作ってくれたミユアに感謝を込めて「いただきます」と挨拶をする。
ミユアも自身の胸の前で掌を合わせていた。

テーブルにはパンや今日買ってきたであろう新鮮なサラダ、じゃが芋や大根等に少しの肉が入っている赤い色をしたスープはクレアの好物であるトマの株のスープ。

クレアは早速好物のトマのスープをスプーンで掬い、口をつける。

熱いのは苦手なのをミユアは分かってくれているので、スープの温度は少し温かい程度。
口の中に広がる様々な野菜や肉等の風味、あっさりとした感触。体調があまりよくないクレアにとっても簡単に食べられる。

「美味しい」

クレアはミユアにそう言い、ミユアはそれに朗らかな笑みで返す。
いつもと変わらない時間。
それがクレアはこの上なく好きなのだ。

「ごちそうさま」

クレアが再び掌を合わせ、ミユアもそれに続けた。
二人が食事を終える後、ミユアが二人分の食器の後片付けをして台所に行ってしまう。そして数分の後、食器を洗い終えて再びクレアの所へ戻ってくる。その両手には、いつものように水を入れたコップに粉末の薬を持っていた。
ミユアはクレアがいるベットの前に置いてある椅子に座って両手に持っている薬とコップを渡し、クレアはそれを受け取りミユアに礼を言う。

「いつもありがとね。ミユア」

ミユアはブンブンと頭を振る。
「そんなことない」そう言っているのだろう。
そんな彼女にクレアは困ったように笑い、受け取った粉末状の薬を全て口の中にに入れて水を一気に飲み干す。

クレアが今飲んだ薬は効能は兎も角、かなり苦い。
その変わらない薬の、なんとも言えない苦さが舌から脳に伝えられて、クレアは顔をしかめる。どうにか味が美味く、いやせめてもう少し甘くならないだろうか、と切に願ったのは一度や二度ではなかった。

ミユアはクレアが薬を飲んだのを確認した後、椅子から立ち上がり、すっと両手を差し出した。
それにクレアは空になった薬の包みとコップを渡して、そのままベットにゆっくりと倒れ込む。
その拍子に、ベットにブレンドの髪がばさりと舞った。
クレアは薬を飲んだ後はなるべく早く寝ようと心掛けている。その方が薬もよく効くと思うし、毎晩のように、睡眠時間はどうせ削られると分かっているからだ
。

「おやすみ。ミユア」

それなりに大きな声を出して、ミユアに伝える。どうやらちゃんと届いたようで、ミユアは部屋のドアまで向かう足を一旦止めて振り向き、クレアに頷いた。
それを見た後、クレアは満足そうに瞼を閉じる。

「―っぎ」

痛い。

「っ……！」

痛い痛い痛い。

「――――ッゥ！」

痛い痛い痛い痛い痛い。

頭が、割れる。

眠っていたクレアは、激しい頭痛により目を覚ます。

いや、覚まさせられるのだ。

声を出さないように我慢しても、うめき声を出してしまうほどの頭痛。ガンガンと、脳内で割れるような痛みが響く。そのあまりの頭痛の酷さは、クレアに吐き気を起こさせるには充分すぎる程だ。しかも今、クレアを苦しめているのはそれだけではない。全身が発する、燃えるような熱。力を強く込めながら、右手で掴んでいる胸を中心に身体中を走る激痛。ひとつひとつがクレアには拷問のように感じられる。

だがしかし、クレアはミュアに助けを呼ばず、ただひたすらにベットの上でその苦痛に必死に耐えている。この苦しみは慣れるものでは決してないが、知ってるものなのだから。

「――ッァハッ……ハッ……ふぅー」

数分後、体感的には数十分にも感じた痛みはようやく収まり、クレアは息を整え始めた。

毎晩のようにクレアに襲いかかる痛み、眠気等は既に存在せず、はぁと深く息を吐いた。

窓から入る月明かりと、まだ空が全てを飲み込むような、底が見えない、深い海のような紺色をしていることから、今の時刻はまだ夜だと分かる。

（汗でべたつく……）

落ち着いてくると、着ていた服は汗で濡れている事に気付く。その服が肌にべたついて気持悪い。クレアはすぐにその服を脱ぎ、体を拭こうと常にベットに掛けられているタオルに手を掛けて――

「……すぅ」

「……ミュア？」

クレアの妹であるミュアが、床に膝をついて、ベットに腕に伏せるようにしているのを見つけた。

ミュアはクレアとは逆側の壁際にある、もうひとつベットで寝るのが日常だ。クレアは一瞬先程までのうめき声で起こしてしまったか不安になったが、どうやら静かな寝息をかいているので杞憂のようだ。

クレアはふぅ、と息を洩らす。

（……まったく、この子は）

きっと疲れて寝てしまったのであろう。

タオルに伸ばした腕をミユアの頭にやり、起こさないようにゆっくりと、優しく髪の流れに沿うように撫でる。

「んぅ」と、ミユアは少し頭をゆらして唸るが、起きる気配はない。

クレアはそんなミユアを見て、ふと思い出す。

（そういえば、拾った頃は大変だったなぁ……）

全身に傷を負い、血だらけになって、泣きながら近くの森の中で蹲っている姿を見つけた４年前のあの日。クレアに保護されたミユアは生まれつきなのか、はたまた別の何かよる精神的なものなのか、喋ることが出来ない少女だった。

４年前のあの日。何が少女の身に起きたかは、まだ聞いてはいない。が、クレアには大体の予想がついている。しかし、それはミユアの口から話す事であり、自分が言うべきではないのだろう。

「っくし」

くしゃみ。

クレアはずず、と鼻を鳴らす。そういえば、まだ上半身が裸のままだった。そのことを思い出し、少々名残惜しいがミユアの頭から手を放してタオルをとり、汗が渇いてしまった体を拭く。

体を拭いた後はタオルを元の場所に掛け直し、その隣にある代えの服に着替え始める。上手く体を動かせないので、服を着替えるだけでも一苦労だ。

（せめて魔術が使えれば……）

クレアは元々教会で働いていた一人の神官だった。

だが今現在、彼女はその仕事を辞めている。
その原因はクレアがかかっている病気だ。
数ヶ月前からかかったこの病は、今も尚治る気配がなく、毎晩襲いかかる激痛は時が経つにつれて酷くなるばかり。
初めはただ体が重く、時々頭痛がするくらいだったものが、今では先程のようなものになっていた。

それに比例するように、自分の持つ魔力も減少していたのだ。
初めの方では無理をしてまで仕事をしていたのだが、もう仕事の最後の方は、体に力が上手く入らない有り様で、最近では一人では上手く立てない位に体が弱っている。

このままクレアの病気が治らないとなると、浮き彫りになっている問題は将来の生活の事だ。
あまり散財はせずに暮らしてきたので、まだ貯金に余裕があるが、薬代はそこまで安いものではない上に、自分を介護してくれているミュアの体力的、精神的な疲弊だってあるだろう。
それに、ミュア自身の問題も含めて考えれ、生活の限界は近いのは明白だ。

いざという時はミュアだけでも此処から逃がさなければいけない。
しかし、それをこの少女は認めてくれるだろうか――。

クレアは着替えた後、再びミュアを撫で始める。

「本当にごめんね。私がこんなんばっかりに……」

それは少女に対する懺悔。

クレアとミュアは、どちらも既に両親はおらず、また血の繋がっ

た家族もいない。引き取った時の年齢があまり親子とは言えないくらい近かったので、姉妹としての家族だ。
初めはぎくしゃくしていた関係だったが、４年間一緒に暮らしてきた家族の絆は、流れる血は違えど、それと同じくらい深くなっている。

クレアは掛けられている毛布の一枚を彼女に掛けた。

「……こんな病気、すぐ治すからね」

クレアは少し哀しそうな笑みを浮かべながら、撫でていた手でミユアの手を取る。例えそれがうわべだけの本音だとしても。

彼女の頬から落ちた滴は、毛布に丸い染みを作っていた。

翌日。

時刻は太陽が高く昇る、丁度正午の時刻。

クレアは二階のベットではなく、一階の台所まで来て、ミユアと共に料理をしていた。共に、といってもクレアは一人では歩くことや、階段を降りることすらままならないので、ミユアに料理の作り方を簡単に指示しているだけなのだが。

クレアが座っているのは車椅子。といっても簡単に大きな車輪を主軸に、肘掛のがある木製のシートなのだが。キャスターはついていない。もちろん、椅子には柔らかいクッションを敷いている。

「それの芯をとって……。そう、細かく細かく」

今クレア達が作っているのはパンにつける為のジャムだ。　ジャムにするための果物は、真っ赤な色をした拳大程の大きさをした球形の果実、所謂林檎だ。

ミユアはその林檎の皮を剥き、包丁で半分にした後芯を取り除く。そこから更に細かくして、大体一口サイズ程のものを半分にしたそれを、用意していた底が少し深い鍋に入れる。今回は普通に食べる為の一つを残して後は全てジャムにする予定なので、皮を剥いて鍋に入れた林檎の量はかなり多い。

「ぁ」

と、その途中で急に林檎を切っていた腕が止まる。見ると、ミユアは泣いているではないか。

「あれ、ミユア。何で泣いているの？　指でも切った？」

見てみれば、指の先から少し血を流している。「大丈夫」とミユアは首を振り、それに「そう」とクレアは相槌を打ち、ジャム作りを再開する。

一度軽く煮た鍋の中に、砂糖を入れる。その作業が終わりミユアはふうと息をついて、椅子に座る。

「美味しく出来るといいわね」

クレアが言うと、ミユアはうん、と頷く。

出来たジャムはほんのりと酸味が利いた、甘い味がした。

昼の食事が終わり、休んでいた所でコンコンと入口のドアが叩かれる。

ミユアはクレアの車椅子を押して玄関まで行こうとしたのだが、それをクレアは断った。

何か、嫌な予感がする。

「ミユアは二階に、お願い。何か嫌な予感がするの」

ミユアは不満気だったが、姉であり恩人でもあるクレアに迷惑を掛けてはいけないと思ったのでその言葉に従い、二階へ行く。ミユアが二階へ上るのを確認クレアは、車椅子で――少々ゆっくりにだが玄関へと進んで行き、ドアに向かう。

「どなた様でしょうか」

扉を閉めたまま、クレアは外にいる者に声をかけた。

元々クレアの友人は余り家に来ない。職場の同僚にはなるべく関

係を作らないようにしてきたので、そもそも友人と呼べる者が少ないのだが。

いやな予感がする。そう思いながら返事を待つ。

答えた声は、若い男の声。

「クレア・カーマインさんのお宅ですね？」

「……そうですが」

「教会の者です。少々お話したいことがありますので、鍵を開けてくれませんか？」

「っ……分かりました。少々お待ちください」

そして、その予想は的中する。

クレアは再び階段の方へ視線をやり、其処に誰も居ないことを確認してから、身を少し乗り出すようにして扉の鍵を外す。すると、クレアがドアに手を掛けることなく扉が開けられた。

扉の前に居たのは二人の男性。一人の外見はおそらくだがクレアと同じ位ではないか。細身細目で百八十なかば程の長身に長い黒ズボン。股辺りまである淡いセピア色をして前と後ろのみを隠した貫頭衣を上に着て、その腰辺りから少し見える先端は、木の枝を加工して先端を尖らせた棒だ。恐らく彼の魔術の為のものなのだろう。

もう一人、こちらはもう一人とは違い髭も生えており、顔には皺が寄っている中年の男性。服装は貫頭衣は同じものだがを居ているが、ズボンの形状が少し違い、色も黒ではなく濃紺色だ。

「こんにちは。貴女がクレアさんでよろしいですか？　私はグリニ

ール・ダルタと申します」
「デトイ・クリーズだ」
細身の男――グリニールがクレアに先に挨拶をして、中年の男性――デトイが面倒くさそうに続く。
「クレア・カーマインです。それで、話とは何ですか？　時間がかかるようでしたら――」
しかしクレアが注目したのはそこではない。注目したのは彼等の胸に付けられている銀の勲章だ。
デトイには左右対象の二頭の竜、中心には一本の聖剣が彫られた銀のバッチ。
グリニールには左右対称の二頭の獅子、中心には一本の聖剣が彫られた銅のバッチ。
それはリュテミス王国の神官長と神官の証。
クレアはごくりと息を飲む。その勲章は、彼女達にとって悪魔のような象徴なのだから。
「時間は余り取らせませんので」
「では、ここで聞きましょうか」
内心の動揺を表情に出さずに、クレアは手を腿の上に乗せて組む。
そして先にグリニールと言った彼がクレアの目を見、口を開いた。
ちらともう一人の神官、デトイに目を向けると、彼は此方の方を見ず、グリニールの後ろから覗き込むようにクレアより奥――家の内部を見ていた。それを特に隠そうともしていない彼の態度に、ク

レアは若干嫌悪感が芽生えるが、やはり表情には出さない。

「では早速。この度の要件ですが、ミユア・カーマインさんでしたか。貴女の妹……、いえ、“義妹”でしょうか」

「……そうですが、何か」

――矢張り。

教会の下で働く者が此処に来る理由とすれば彼女の事だろうと予測はついていた。

だが、どうするか。

クレアにはその対処法がすぐに頭に浮かばない。この時に供えていろいろ考えていたのだが、余りに突然の来訪に、動揺がまだ抜けていないのだ。

だが、グリニールはそんなクレアの内心など気にもせずに話を続ける。

「いえ、失礼。特に意味はないのですが、どうやら四年前辺りで拾ったそうで――」

「今、居るか？」

グリニールの話に重ねて発言したのはデトイだ。「面倒だ。どけ」と彼はずいとグリニールを肩でどかして、クレアの正面に立つ。

どかされたグリニールはやれやれ、と呆れた笑みをしながら肩を竦めていたが、特に気にするわけでもないようで「どうぞ」と答えていた。

「で、今そのミユアという小娘はいるのかと聞いているのだ。早く答えろ」

「いえ、いません」

そのデトイの威圧的な、尋問と言った方が正しいような口調に、クレアはきっぱりと言った。

だが、クレアにとってもちろんこれは嘘だ。ミュアは今もちゃんと家の二階に居る。これで帰ってくれれば、と願いつつ、クレアは組んだ手を解いて、車椅子の肘掛けに手を乗せ二人の事を見続ける。

「いないだと？ならば何時戻ってくる」

「今日の明け方に故郷の方に行ったので、少なくとも一ヶ月は帰って来ませんが

」

「帰省だと？嘘をつくなっ！」

突然、デトイが怒鳴り、一歩足を進める。

その様子にクレアは身を震わせ、冷や汗をかくのを背中に感じたが、その場から車椅子は動かさなかった。まあ、白々しすぎると自身でも思いながら肘掛けを指で叩く。

そのカンカンと軽い音は、家によく響いた。

「あの、家の妹が何かしたのでしょうか？」

「少々、気になる噂が入りましてね」

答えたのはグリニール。腕を胸の前で交差させ、微笑みながら答えるその姿は、クレアにどこか不安を感じさせる。

「噂、ですか？」

「ええ、噂です。それも、極単純なものです。

貴女の家には、“異端”が住んでいる。

とですね」
「……それは」
「失礼だとは思いますので初めに謝罪をしますが、貴女の事を簡単に調べました所、この家に住んでいるのは貴女と義理の妹のみでした」
「……」
「しかし、貴女は教会で働いていた身。異端である者を、私達教会が神に任えさせる筈がありません。それに加えて、ミュアさんは一度もミサに来て無いようでしたので、この機会に是非一度着て頂きたいと思いまして」

一旦言葉を区切ったグリニールは、ダリオロッソの方に目をやる。それにデトイは面倒くさそうに「早くしろ」とせかした。

「ところが、です。貴女の情報は簡単に出てきたというのに、妹さん、いや“義理の”でしたか。そちらの情報がまったく出てこないのです」
「ない。と言うと？」

クレアは頑に話を伸ばそうとする。
彼の嫌な笑み。
もう露呈しているのだろう。それならば、先程の合図を受けたミュアを出来る限り此処から離れさすのが、今クレアにとって出来る最善の手段。

「まあ、つまりは、義理の妹さんの情報がないので、直接確認しに来たのですよ。私達は」

だが、その手段は既に意味は無く。

「まあでもミユアさんが居ないのならば、彼女はただのこそ泥ですか。デトイさん」

とグリニールの言葉と共にデトイが半歩引き、上半身だけを捻らせて後ろを振り向く。

デトイが引いたことにより、クレアの視界には玄関の庭が見えるようになる。そこには、見慣れた庭と、いつも見ているコートを頭から被った少女と、その少女の腕を掴んでいる見慣れない、鎧を着た複数の兵士がいた。

「ッミユア！」

顔を伏せているミユアは両腕を、別々の兵士に掴まれており、その頬は殴られたのか赤く腫れていた。

「ミユアに、何をしたのッ？！」

「あらら、矢張り義妹さんのミユアさんですか。彼女は貴女の家から出た後、裏の路地の方を歩いていたので、声を掛けた所、逃げたそうですので。一応、知り合いの方かどうか確かめに来たのですが」

にこりと笑うグリニール。

「まあ、貴女が先程言った事は、私は気にはしませんが」

ちらりとデトイを見て、ミユアの方に近づく。

「一応、教えですので」

中央通りのつきあたり、言わば都市の中央付近にあるギルドのを右に曲がり、そこから数百メートル歩いたところにそれはある。

リュテミス王国教会。

地球で言えば大体三階建て位の高さだろうか。ギルドの高さには及ばずだが、広さは同じかそれより少し長い。出入口である木製の扉――こちらは完璧なドア――がある外壁の上方には金属の素材が埋め込まれていて、対になっている天使と、やはり一本の聖剣が魔術刻印とともに彫られている。入り口の辺りには紺色のローブをきた神官が二・三人教会に寄付を呼び掛けていた。

クレアが久しぶりに見る教会は、まったく変わっていない形で其処に在った。

既にクレアとミユアの、この国での命運は尽きた。最悪、“この世”になるかもしれない。

ミユアはクレアと共に兵士達に囲まれているが、車椅子を押しているのはミユアではなく、兵士の一人がその役をしている。逃げられない。まあ、逃げてもここでは無駄だろうが。

先頭を歩くのはデトイ、それに続いてグリニールだ。

グリニールは少し足を速め、教会の前に居る神官達に話しかける。

「すまんが、ちょっと入らせてくれ」

「あ、グリニール神官。その子供は？」

「ちょっとミサに、ですね」

「ああ、分かりました。ようこそ、教会へ」

「あ。兵士さんたちありがとうございます。ここまでいいので」

とグリニールは兵士達に礼をいい、デトイはミユアの腕を掴む。

「ほら、早く来い」

「っ！」

ぐい、ミユアはデトイに引っ張られ、思わずとととっ、と足をもつれさせながらも教会の中に入る。

車椅子を引いていた兵士が居なくなり、動かなくなったそれが再び動き出して、クレアは伏せていた顔を上げ、後ろを振り向くと、彼――グリニールが車椅子のグリップを握り、此方を向いていた。

「ではデトイさん。確認お願いしますね」
「ああ、まかせろ」
「ミユアッ！」

そのままミユアは連れて行かれ、入り口に残るのはクレアとグリニールだけとなる。

「私達は礼拝堂にでも行き、待ってましょうか」
「っ貴方は――」
「ようこそ、教会へ」

彼の笑顔は、まるで悪魔のように、クレアは感じた。

◆

クレアから離れさせられたミユアは一つの部屋の教会の一室にいた。
木製の机に椅子。単調な白い色をした壁と、どこか普通の部屋だというのは分かったのだが、ミユアにその部屋を観察する余裕は無くなった。

「さて」
「！」

なぜならば、神官の彼が少女の腕を掴んだからだ。彼はミユアの顔に手を近付け、フードを捲ろうとする。

「いいから早く見せろ！」

ミユアは近付く手を掴んみ引き離そうと抵抗するが、それは二回

りほど大きな彼には虚しく終わり、彼の手がミユアのかぶっているフードをばさりと捲られる。

「あっ！」

「――緋瑠璃族！」

フードの下から出てきたのは、二本の角。

捻れているそれは彼女のこめかみに上を向いて生えていて、美しい瑠璃色をしていた。

緋瑠璃族。

それはリュテミス王国の異端認定を受けた種族の一つ。

赤い髪に瞳、頭のこめかみには2本の美しい青――瑠璃色をしているのが特長であり、その角は宝石かと見間違えるだろう。だが、それは悪魔と契約した証の一つだと言われている。異端認定を受けた種族はリュテミス王国領土から排斥されて、国を追われるか最悪処刑だ。

「そうか、そうか」

ダリオロッソは深く頷き、ミユアの肩に手を置いて力を込めて強く掴む。

「――ッ」

その握力に思わずミユアは顔を歪ませた。が、そんなことを気にもせずに、デトイは歪んだ笑みを浮かべてミユアを部屋の奥へと引っ張っていく。

「この部屋だ、入れ」

部屋の奥にあるのは頑丈そうな扉。　それにはいくつかの南京錠がされ、鍵を持っている者しか入れないようになっている。
そしてデトイは袋から取り出した鍵束を使い、部屋の扉にかかっていた錠を外し、彼はミユアの背中を押す。その手の感触はミユアにはあまり心地のいいものではなく、早く彼から離れたいという一心で扉を開けて部屋の中に入ったのだが、

「ッ――――」

ミユアは声にならない声で絶望の声を出す。
視界に入ったのは魔術の薄暗い灯りしかない部屋と、そこに置かれた様々な器具。三角木馬に鉄の牢屋。床に落ちている枷には重りである大きな鉄球が、壁には鞭や剣や斧等が掛けられている。

まるで拷問部屋。
そう、それは懺悔室ではなく、紛れもない拷問部屋だ。

完全にミユアは自分が何をされるかということを悟る。教会がこんな部屋を隠していたなんて知らなかったのだ。

しかし、一つ疑問が浮かぶ。
ミユアの姉であるクレアは、この部屋の事を知っていたのだろうか。
異端である自分を引き取った、心優しい姉が、許容していたというのだろうか。
わからない。あの姉がこんなことを許すのだろうか。わからない。わからない。

がしゃり、と何かの鍵が掛けられる音に、ミユアは混乱する思考を中断させる。
見ると、彼の手の中にあった手綱が今は、壁の窪みにある棒に繋がれていた。

パァン、と渇いた音が拷問部屋に響き、ミユアはその方向に目をやると、彼女を連れてきたデトイの手には一本の鞭。
その鞭を掴んでいる手をミユアに向けて、口を開いた。

「これより、“異端”である緋瑠璃族の少女の＞救済＜を行う」

職業、リュテミス王国＜イスタルディオ＞大陸都市＜シンリラ＞地区教会神官隊隊長デトイ・クリーズ。３７歳、男。
功績、反教会組織《聖域（ヴァーティマ）への道》・数多の他宗教信者の摘発及び処罰。
「これより、“異端”である緋瑠璃族の少女の＞救済＜を行う」
それが、ミユアに鞭を振りかざしている人物。
それが、鎖に繋げた少女に笑っている人物。
それが――――

――パァン！
再び、乾いた音が部屋の中に響く。
ただし今回は宙に振られずに、コートの上からミユアの身体――太腿辺りに当たり、その衝撃で其処の部分だけ破れた。

「っ！」
「ふむ、いい感触だ」

ヒュンヒュンと、ただの革ひもの鞭を振るいながら、デトイは満足そうに呟き、ミユアの方を向いた。
ミユアはその視線に痛みを堪えながら、睨む。

パァン！

「――ッ！」

再び、鞭によりコートごと鞭で叩かれ、声に成らない苦痛の声が上がる。
されど、彼女は悲鳴を上げずにデトイを睨む。彼女の瞳には強い意志が宿っていた。

「ふむ。いいぞ、その目。＞救済＜のしがいがあるというものだ」

デトイは彼女の視線など意にも介さずに、持っている鞭を振り上げて――

――勢いよく振り下ろした。

「……？」

しかし、痛みに耐えようと歯をくいしばっていたミユアの耳に届いたのは鞭の乾いた音ではなく、ぼとっという何かが落ちる音だった。

ミユアは瞑っていた目を、恐る恐る開ける。

そこには、

「さて、意味が理解できるけどここまで納得できない状況になってるとは……」

そこには、一人の青年が居た。

黒い短髪に、淡い蒼の甚平。七部丈のそろいのズボンを履き、足には二本の歯がついた下駄を履き、右手には鍔の無い六十センチ程の小太刀をダリオロッソに向けている。

その小太刀は既に鞘から抜かれていた状態で。

「――誰だ貴様！　どうやってここに入った？！」

デトイは声を荒げて突然の侵入者に怒鳴る。彼は向けた剣をそのままに、肩を竦め、

「本当にさ、がんばって創ったのに何で迫害とかされてんの？　異

端って何さ」
「貴様は――その緋瑠璃族庇うのか？」
「質問を質問で返さないで欲しい……。まあいいか、後で聞こう」
彼は怒りの表情をして、言う。
「お前等、俺の庭を荒らした覚悟は出来てるんだろうな」

◇

どさり。とデトイは崩れ落ち、手に持っていた鞭も床に転がった。
彼はデトイの懐に手をいれて鍵を取り出し、ミユアに歩み寄って介抱するように優しく声を掛ける。

「すまん。助けんの遅れた」

助けられた――。と気づいたのは話しかけられた時、つまり今だ。だが、今のミユアには助かったと思う前に疑問で思考が埋まる。

（誰だろう。この人？）

今まで、ミユアに会った人にこんな人は居なかった。もしかしたらクレア姉さんの友達かもしれないが、こんな人は聞いたことも無かった。

「えっと、聞こえてる？」

慌ててミユアは頷いてありがとう、と言おうとしたのだが、声が出ないことにきずく。ど、ど、どうしよう。

「ああ、えーと、君、声を出せないのかな？」

そんなこんなで考えていると、その少年から声がかかり、ミユアはそれに頷く。

何だろう。この安心感は。

知っているようで知らない。見たことありそうで見たことが無い。そんな既視感を記憶では無く体が、血が、細胞が覚えている感覚。

「ああ。そうなの。じゃあちょっと待ってね」

そう言って彼はポケットから何か、再び掌ぐらいの大きさをした黒い物を取り出して、何かを操作する。

そして画面を見ながら、ミユアに声を掛けた。

「はい、どうぞー」

（えっと……？）

「ああ、俺に話したい言葉を思うだけでいいから」

何を言っているんだろう？

ミユアは彼の言っていることはよく分からない。が、とりあえず心の中で会話すればいいのかな？と思いながら礼をしてみた。

（えっと、先程はありがとうございました）

「どーいたしまして、できればリオの奴にも言ってくれ」

「……？」

「誰って？　気にしなくていいよー。でも後で会ってもらいたいけどね」

ミユアの腕に繋がっている手枷をガチャガチャと鍵を一本一本試しながら会話をしていた。

というより、会話している？

自分は声を出していないのに？

魔術を使った気配は無いのに、この人はどうやって？

そんな疑問に答えるように彼はその手に持った黒い箱の、画面らしき部分を指し示して、「これのおかげだからー」と答えた。

まあ、よく分からない。

ミユアはとりあえずその事は置いといて、気になっていることを聞いてみることにした。

（あの、貴方は……？）

彼は、ミユアに顔を向け、目を合わせて笑い、

「カミヤ、唯のカミヤだ」

そう答えた。

ガチャリ。と手枷の鍵が外され、ミユアの両手は自由になる。うーんと手を頭上で組んで伸びをして、ふと視界に入ったのは先程の神官長の彼。
先程からピクリとも動かないデトイに、ミユアは恐る恐るカミヤに聞いてみる。

（あの、あの……あの人は？）
「ん、あいつのこと？　殺してないよ。気絶してるだけ」
（……そうですか）

ちょっと胸が軽くなる。もしかしたら、自分のせいで人が死ぬのは嫌だったのかもしれないな。と驚きながらも自己分析をしていたミユアに、今度はカミヤから声がかかった。

「あの、ミユア。だったよね」
（あ、はいっ。そうですが！）
「これから、＞アルカディア＜に連れて行っちゃうけどいい？　てかほぼ強制なんだけど。お仲間さんとかいる？」
（え）

確かに、この都市ではもう暮らしてはいけないだろう。きっと警備も強化されるはずだ。ならばここは彼に着いていった方が――――。

（あれ？）

今、カミヤはなんと言った？
私を―何処≪・・・≫に連れて行くと言った？

「あ、あの」
「ん？　なに？」
「ど、どこかもう一度聞きたいのですが」

カミヤは、「ああ、そんなこと」と呟いて、もう一度ミユアに言う。

「＞アルカディア＜だよ。知ってる？」

彼女達の―神話に出てくる地名≪・・・・・・・・・・・・≫を。

神の大国＞アルカディア＜。
この世界に、存在しないと言われていた土地。
そして、＞出現＜した族民族達の、御伽噺。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4986r/

それいけ、アルカディア!　（旧395年遅れの箱庭）

2011年4月18日21時39分発行